北海道立埋蔵文化財センター

重要遺跡確認調査報告書

第14集

湧別町　川西２遺跡

平成30年度
北海道立埋蔵文化財センター

北海道立埋蔵文化財センター

重要遺跡確認調査報告書

第14集

湧別町　川西２遺跡

平成30年度
北海道立埋蔵文化財センター

1　川西地区三遺跡の竪穴分布　（グーグルマップを使用してシン技術コンサルが作成）

口絵 2

1　エレベーション測量作業風景（竪穴 6 ）　北東から

2　測量実習

3　測量作業風景（東ー西 6 ライン付近）南東から

4　測量作業風景（南ー北 4 ライン付近）南東から

1　南エリア竪穴（東ー西10ライン付近）　南から

2　南エリア竪穴（東ー西15ライン付近）　南から

口絵 4

1　北エリア竪穴（東ー西19ライン付近）　南から

2　超特大竪穴（竪穴22）　北西から

例　　言

1　本書は平成30年度に北海道立埋蔵文化財センター指定管理者 公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施した重要遺跡確認調査の報告書（第14集）である。

2　本報告書では湧別町川西２遺跡についての調査成果を所収した。

3　本書の編集は坂本尚史が担当した。執筆はⅠ章およびⅡ章第１～５節を坂本、Ⅱ章第４節３項を柳瀬由佳が執筆した。

4　写真撮影及び図版作成は中山昭大（第１調査部第１調査課）が行った。

5　地形測量図、竪穴・遺物分布図などの縮尺は挿図ごとに明記した。記載のないものは任意縮尺であるが、各図にはスケールを配置している。

6　掲載遺物は土器のみで、縮尺は１：３とした。

7　基準点測量およびトータルステーションシステム・遺跡管理システムなど測量機材の借用、測量機材操作指導については㈱シン技術コンサルに委託した。

8　重要遺跡確認調査報告書は年次報告の性格上、調査・整理途中の成果報告を含むため、過年度報告の内容に誤りや変更等があった場合は、本報告で訂正し再掲載している。

9　調査・報告にあたり、下記の諸機関及び各位のご指導・ご協力をいただいた（順不同・敬称略）。

北海道教育庁生涯学習部文化財・博物館課

北海学園大学　澤井　玄

札幌市教育委員会　榊田朋広

東京大学　熊木俊朗

名寄市　氏江敏文

常呂町教育委員会　山田　哲

湧別町教育委員会　阿部　勉　田中 仁　中島一之　林 勇介

目　　次

口絵
例言
目次

Ⅰ　重要遺跡確認調査について …… 1
1　重要遺跡確認調査 …… 1
2　今年度の調査について …… 1

Ⅱ　湧別町川西２遺跡の調査 …… 3
1　調査の概要 …… 3
(1)　調査要項 …… 3
(2)　調査体制 …… 3
(3)　調査の経緯 …… 3
(4)　調査の経過 …… 4
2　遺跡周辺の環境 …… 4
(1)　遺跡の立地 …… 4
(2)　周辺の遺跡 …… 7
(3)　北海道東部の竪穴住居跡群調査について …… 7
3　調査の方法 …… 8
(1)　測量調査 …… 8
(2)　竪穴観察 …… 10
(3)　写真撮影 …… 11
(4)　関連資料調査 …… 11
4　調査の成果 …… 11
(1)　測量成果 …… 11
(2)　竪穴観察 …… 11
(3)　関連資料調査 …… 29
5　まとめ …… 31
(1)　測量成果と竪穴観察結果について …… 31
(2)　シブノツナイ竪穴住居群との比較 …… 32
写真図版 …… 39
報告書抄録 …… 47

挿図目次

図Ⅰ-1　国、道指定史跡の位置と重要遺跡確認調査 …… 1
図Ⅱ-1　遺跡の位置と周辺の地形 …… 5
図Ⅱ-2　川西地区三遺跡の竪穴分布 …… 6
図Ⅱ-3　測量基準点の位置 …… 8
図Ⅱ-4　川西２遺跡竪穴分布状況 …… 12
図Ⅱ-5　竪穴詳細分布図（北エリア）…… 13
図Ⅱ-6　竪穴詳細分布図（南エリア）…… 14
図Ⅱ-7　竪穴属性集計結果 …… 17
図Ⅱ-8　形状別竪穴分布状況 …… 18
図Ⅱ-9　規模別竪穴分布状況 …… 19
図Ⅱ-10　深さ別竪穴分布状況 …… 20
図Ⅱ-11　竪穴エレベーション図(1) …… 22
図Ⅱ-12　竪穴エレベーション図(2) …… 23
図Ⅱ-13　竪穴エレベーション図(3) …… 24
図Ⅱ-14　竪穴エレベーション図(4) …… 25
図Ⅱ-15　竪穴エレベーション図(5) …… 26
図Ⅱ-16　竪穴エレベーション図(6) …… 27
図Ⅱ-17　竪穴エレベーション図(7) …… 28
図Ⅱ-18　掘上げ土投げ込み竪穴の分布 … 30
図Ⅱ-19　隣接地表採資料 …… 31
図Ⅱ-20　遺跡周辺の海水面上昇シミュレーション …… 32

表目次

表Ⅰ-1　重要遺跡確認調査一覧 …… 2
表Ⅱ-1　竪穴規模の分類 …… 10
表Ⅱ-2　竪穴深さの分類 …… 10
表Ⅱ-3　竪穴集計結果 …… 16
表Ⅱ-4　掘上げ土竪穴の関係 …… 21
表Ⅱ-5　礫確認竪穴と竪穴形状 …… 21
表Ⅱ-6　確認竪穴一覧 …… 35

写真図版目次

口絵１　川西地区三遺跡の竪穴分布
口絵２　1　エレベーション測量作業風景（竪穴６）
2　測量実習
3　測量作業風景（東-西６ライン付近）
4　測量作業風景（南-北４ライン付近）
口絵３　1　南エリア竪穴（東-西10ライン付近）
2　南エリア竪穴（東-西15ライン付近）
口絵４　1　北エリア竪穴（東-西19ライン付近）
2　超特大竪穴（竪穴22）
図版１　1　遺跡遠景
2　遺跡の立地する台地と周辺低湿部
図版２　1　円形　小　竪穴14　南エリア
2　円形　小　竪穴100　北エリア
3　円形　中　竪穴30　南エリア
図版３　1　円形　中　竪穴76　北エリア
2　多角形　中　竪穴25　南エリア
3　多角形　中　竪穴64　北エリア
図版４　1　多角形　大　竪穴５　南エリア
2　多角形　大　竪穴29　南エリア
3　方形　小-中　竪穴８　南エリア
図版５　1　方形　小-中　竪穴81　北エリア
2　方形　中　竪穴20　南エリア
3　方形　中　竪穴79　北エリア
図版６　1　方形　大　竪穴22　南エリア
2　方形　大　竪穴84　北エリア
3　隣接地表採資料

Ⅰ　重要遺跡確認調査について

1　重要遺跡確認調査

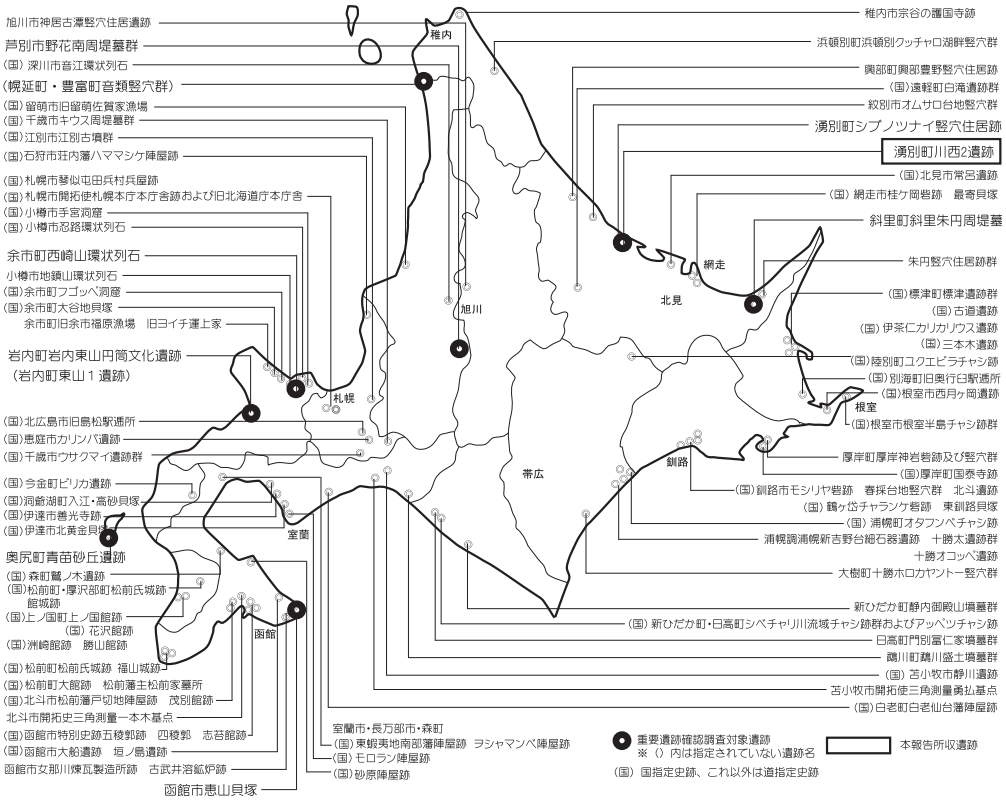
北海道立埋蔵文化財センターは、北海道教育委員会（以下、道教委）が北海道史をたどる上で重要であるとした遺跡の重要遺跡確認調査を行ってきた。これまでに、平成12年度に小樽市・余市町の西崎山ストーンサークル、13・14年度に奥尻町青苗砂丘遺跡、15・16年度に恵山町（現函館市）恵山貝塚、17～21年度に幌延町・豊富町の音類竪穴群、22・23年度に斜里町朱円周堤墓（道指定史跡「斜里朱円周堤墓及び出土遺物」）、24・25年度は芦別市野花南周堤墓群（道指定史跡「野花南周堤墓群」）、26～28年度は岩内町東山１遺跡（道指定史跡「岩内東山円筒文化遺跡」）、27～29年度は湧別町シブノツナイ竪穴住居群（道指定史跡「シブノツナイ竪穴住居跡」）の測量・発掘調査等を行った。

2　今年度の調査について

今年度は、新たに湧別町川西２遺跡が調査対象となった。調査の具体的な内容は道教委による「平成30～33年度重要遺跡確認調査実施要領」に基づき、道教委、湧別町教育委員会との打ち合わせにより計画されたものである。

今年度は現地調査として①測量調査、②竪穴属性観察、③写真撮影を、関連資料調査として④川西２遺跡隣接地より表面採集した資料の実測・拓影図作成と撮影を実施した。

本報告書（重要遺跡確認調査報告書第14集）では、竪穴分布図、竪穴観察成果、関連資料調査成果について報告した。



図Ⅰ－１　国、道指定史跡の位置と重要遺跡確認調査

表Ⅰ－1　重要遺跡確認調査一覧

対象遺跡	登載番号	所在地	種別	調査年度	主な調査方法	調査面積	主な時期	主な調査遺構	主な出土遺物	掲載報告書
小樽市 余市町 西崎山 ストーン サークル	01203- D-01-64 (小樽市) 01408- D-19-04 (余市町)	小樽市蘭島 余市町栄町	配石 遺構	平成12年度	発掘調査	140㎡	縄文時代 後期	配石遺構	縄文時代後期、晩期の土器、黒曜石の剥片	重要遺跡確認調査報告書　第１集
奥尻町 青苗砂丘 遺跡	01367- C-07-4	奥尻郡奥尻町 字青苗364・ 368番地	集落跡	平成13年度	発掘調査	90㎡	オホーツク 文化期 擦文文化期	住居跡１軒 土坑１基 貝塚１か所 焼土３か所	オホーツク式土器、土師器　石器、石製品 骨角器　金属製品 自然遺物	重要遺跡確認調査報告書　第２集
				平成14年度	発掘調査	90㎡	オホーツク 文化期 擦文文化期	住居跡４軒 墓２基 貝塚１か所	恵山式土器 オホーツク式土器 土師器及び擦文土器 石器類玉など石製品 骨角製品、金属製品、 自然遺物	重要遺跡確認調査報告書　第３集
函館市 恵山貝塚	01202- B-10-35	函館市字恵山 308番地の１ ほか	貝塚	平成15年度	発掘調査	97㎡	続縄文 文化期前半	竪穴式建物の可能性のあるもの６か所 墓の可能性のあるもの４か所 遺構覆土中に形成された魚骨層を２か所で確認	土器、石器、骨角器	重要遺跡確認調査報告書　第４集
				平成16年度	発掘調査	169㎡	続縄文 文化期前半	盛土遺構（続縄文文化期のもので、厚さは１ｍを超える） 竪穴住居跡1か所 土壙2基 集積1か所 焼土	土器、石器、 骨角製品	重要遺跡確認調査報告書　第５集
幌延町・ 豊富町 音類竪穴群	01488 (幌延町)- 01510 (豊富町)- G-09-01	天塩郡幌延町 字浜里188 ほか 国有林174～ 175林班	集落跡	平成17年度 平成18年度 平成19年度 平成20年度 平成21年度	測量調査 踏査	約６㎢ (測量範囲)	擦文文化期 アイヌ文化期	竪穴状の窪み 796か所 チャシ跡３か所	踏査のため出土遺物はなし。	重要遺跡確認調査報告書　第６集 重要遺跡確認調査報告書　第７集
斜里町 斜里朱円周 堤墓	01545- I-08-38	斜里郡斜里町 朱円西76番地 1	墳墓	平成22年度 平成23年度	発掘調査	210㎡ (トレンチ調査面積)	縄文時代 後期	周堤墓２基 （A 号、B 号）	縄文土器片 ※昭和23，24年度調査時の出土遺物の資料化を行う	重要遺跡確認調査報告書　第８集
芦別市 野花南 周堤墓群	01216- E-04-021	芦別市野花南 町3256，3257	墳墓	平成24年度 平成25年度	発掘調査	86.5㎡ (トレンチ調査面積)	縄文時代 後期	周堤墓２基 （１号、２号）	縄文時代後期から晩期土器片、黒曜石石器類	重要遺跡確認調査報告書　第９集
岩内町 東山１遺跡 （道指定史跡岩内東山円筒文化遺跡を含む）	01402- D-13-01	岩内郡岩内町 東山15、16-1・ 2番地	集落跡	平成26年度	発掘調査	600㎡ (トレンチ調査等面積)	縄文時代 前期 縄文時代 中期	盛土遺構２か所 竪穴住居跡４軒 土坑19基 柱穴状ピット７基 焼土12か所	縄文土器片 （前期から中期） 石器類 （礫石器を主とする）	重要遺跡確認調査報告書　第10集
				平成27年度	発掘調査	60㎡ (トレンチ調査等面積)				重要遺跡確認調査報告書　第11集
				平成28年度	整理作業	-				重要遺跡確認調査報告書　第12集
湧別町 シブノツナイ 竪穴住居群 （道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡）	01559- I-21-35	北海道湧別群 湧別町川西 499-1、499-2 930 722-1 722-2 722-3 720 719 503 502-1，2 714 717 718	集落跡	平成26年度	踏査	139，486㎡ (測量範囲)	続縄文文化期 擦文文化期 オホーツク 文化期	竪穴530か所	続縄文土器片 （後北 C_2・D 式） 石器類	重要遺跡確認調査報告書　第10集
				平成27年度	測量調査					重要遺跡確認調査報告書　第11集
				平成28年度	測量調査					重要遺跡確認調査報告書　第12集
				平成29年度	測量調査 発掘調査	30㎡ (トレンチ調査等面積)				重要遺跡確認調査報告書　第13集
湧別町 川西２遺跡	I-21-56	北海道湧別群 湧別町川西	集落跡	平成30年度	測量調査	約17，000㎡	擦文文化期 オホーツク 文化期	竪穴102か所	なし	重要遺跡確認調査報告書　第14集

Ⅱ　湧別町川西２遺跡の調査

１　調査の概要

⑴　調査要項

調 査 名 称　重要遺跡確認調査
調 査 対 象　湧別町川西２遺跡（Ⅰ－21－56）
所　在　地　紋別郡湧別町川西501－１、508、509番地
対 象 面 積　約17,000㎡
調 査 期 間　平成30年９月３日～９月22日

⑵　調査体制

北海道立埋蔵文化財センター指定管理者 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター

理　事　長　　越田賢一郎
副 理 事 長　　中田　　仁
事 務 局 長　　山田　寿雄
常 務 理 事　　長沼　　孝
総　務　部　　部長　和田　基興（平成30年６月まで）、成田　直彦（平成30年６月から）
第１調査部　　部長　長沼　　孝
普及活用課　　課長　田口　　尚
　　主査　坂本　尚史
　　主査　柳瀬　由佳
第１調査課　　課長　中山　昭大

⑶　調査の経緯

ア．昭和期の調査・記録

川西２遺跡が埋蔵文化財包蔵地に登載されたのは平成29年１月で、近年確認されたところであり、過去、発掘調査が行われた記録はない。しかし、近隣遺跡の調査報告書等を確認したところ、シブノツナイ竪穴住居群の調査に付帯して、川西２遺跡に該当する範囲に竪穴群が分布していることが記録されていた。

昭和41年（1966年）のシブノツナイ竪穴住居群の調査は、北海道文化財専門委員であった北海道大学教授の大場利夫氏を発掘担当者として湧別町が実施し、同年に「シブノツナイ遺跡調査概要」が刊行されている。この報告書によれば遺跡を北方地区と南方地区に区分し、全体で竪穴665か所が確認されている。両地区の範囲についての具体的記載はないが、調査竪穴に関する文脈から北方地区がシブノツナイ竪穴住居群（町営牧野）に該当するとみられる。また、昭和41年度に作成された湧別町文書「シブノツナイ遺跡発掘調査顛末」によれば、竪穴数の内訳は「町営牧野内」515か所、「牧場入口」107か所、「伊藤務住宅裏林内」43か所と記載されており、後二者が南方地区と捉えられる。地点説明の内容や確認されている竪穴数を勘案すれば、「牧場入口」が川西２遺跡、「伊藤務住宅裏林内」が川西オホーツク遺跡に該当すると考えられ、川西２遺跡の竪穴群が軒数と共に把握されていたことが分

かる。

今回の調査では、昭和41年当時に使用されていた町営牧野（シブノツナイ竪穴住居群）へ通じる旧道が遺跡の西側で竪穴群に接するように確認された。当時調査を担当した大場博士がシブノツナイへ向かう道すがら、川西２遺跡の竪穴を目にしていたことが考えられる。

イ．重要遺跡確認調査

平成30～33年度の４年間で、近接するシブノツナイ竪穴住居群との関係を検討するために必要な基礎情報を確保することを目的に、①遺跡周辺の地形測量・地質学的調査、②竪穴の測量調査、③遺構規模・形態・付属施設に関する定量的・定性的データの取得、④発掘調査を行うことが道教委より指示された。まず、平成30年度は竪穴の測量調査と写真撮影を主体に実施した。

測量調査は竪穴の上端・下端を計測する「詳細測量」を行い、102か所の竪穴を記録した。また、竪穴観察として「下端の盛土」（盗掘排土？）、「下端の窪み」（盗掘坑？）、「下端の礫」・「埋没礫」（石組み炉？）、「掘上げ土投げ込み」について記録した。このほか竪穴分布範囲周辺の地形測量と一部竪穴の断面図（エレベーション図）作成も行った。

⑷　調査の経過

本調査は「平成30～33年度重要遺跡確認調査実施要領」に基づき、平成30年４月24日（火）に道教委文化財・博物館課との協議を経て計画した。

現地調査は準備期間も含め、８月30日～９月22日の間で実施した。調査に先行する８月28日（火）・29日（水）には基準点測量と基準方眼杭の設置を㈱シン技術コンサルに委託して行った。調査員は８月30日から現地に赴き、環境整備や作業準備を行った。また、湧別町教育委員会からは器材置き場として使用するテントなどの借用をはじめ、多大なご協力を頂いた。

本調査の体制は調査員３名・作業員５名、期間は平成30年９月３日（月）～22日（土）（13日間）で、その内容は主に測量調査と写真撮影である。期間中北海道胆振東部地震が発生し、その影響で生じた全道的な停電により２日間の調査中断を余儀なくされたが、天候に恵まれたこともあり、計画通り期間内で竪穴詳細測量を完了することができた。

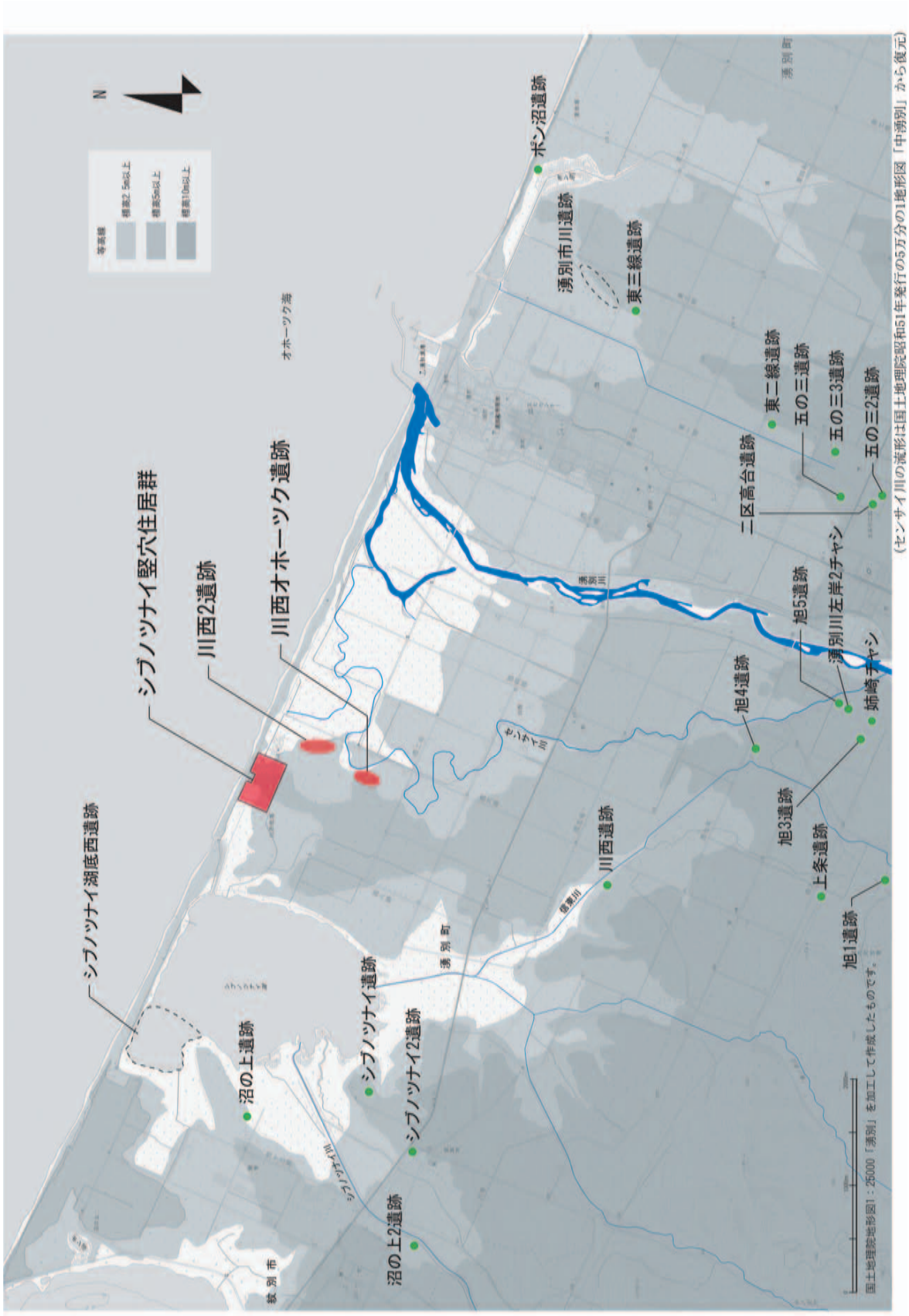
２　遺跡周辺の環境

⑴　遺跡の立地（図Ⅱ－１・２）

川西２遺跡は湧別町川西地区に所在し、同地区は町域最北西部にあたり北はオホーツク海に面している。遺跡は東を湧別川と支流のセンサイ川、西をシブノツナイ湖に挟まれた低平な舌状台地の先端部に立地している。センサイ川は現在河川改修工事により直線的な流路に変更されて遺跡の800ｍほど東で海岸砂丘に到っているが、改修以前は複雑に蛇行し遺跡のすぐ東側を流れていたことが昭和40年発行の国土地理院地図２万５千分の１「中湧別」や昭和28年撮影空中写真に記録されている。

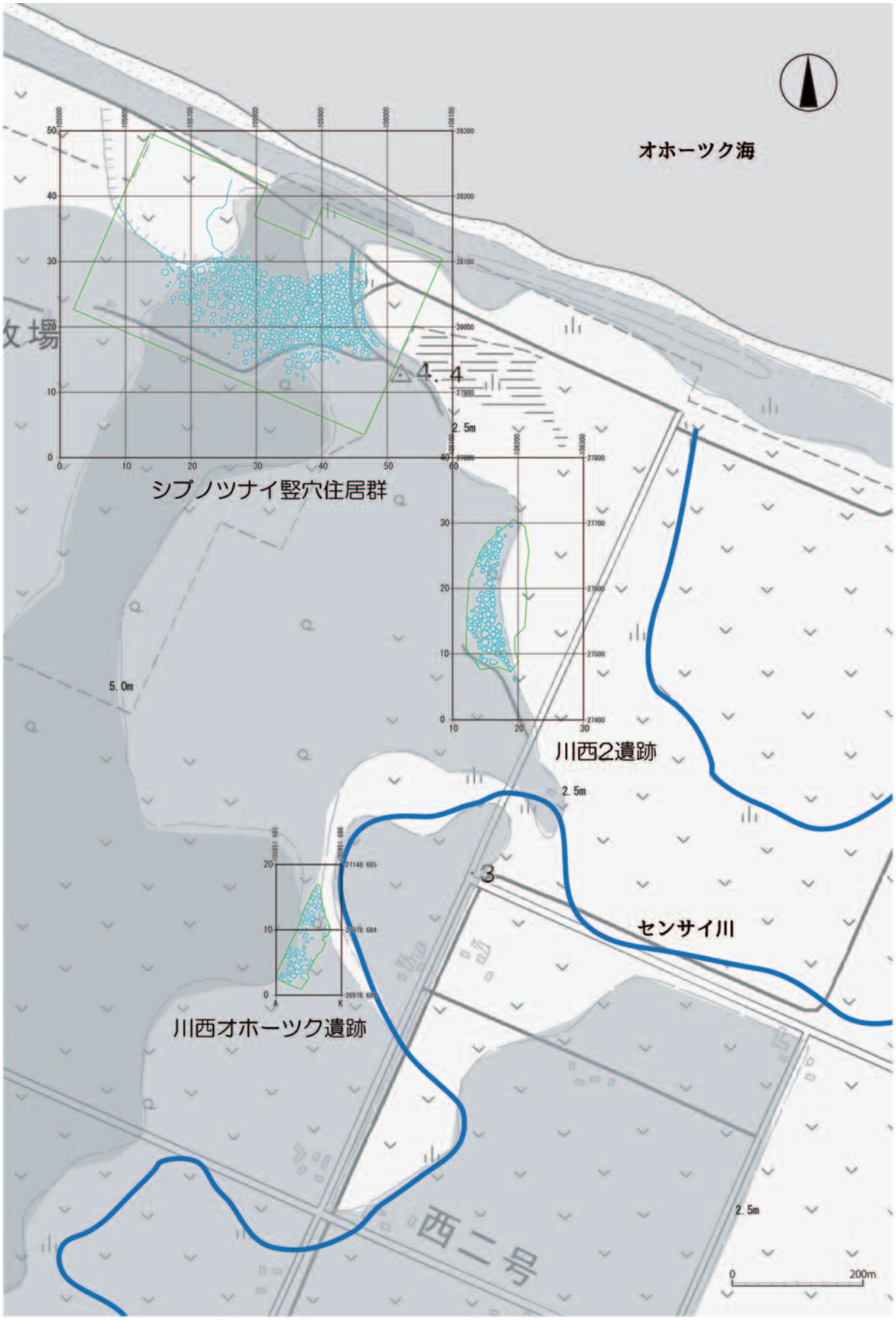
遺跡はセンサイ川左岸、標高５～5.5ｍの台地上に立地する。周囲にはセンサイ川及び湧別川によって形成されたとみられる河跡沼や湿地帯が標高2.5ｍ以下の範囲に広がっており、竪穴群と現在の海岸線との距離もおよそ400ｍと近い。

遺跡が主に形成されたと考えられるオホーツク文化後半期及び擦文文化期は温暖な「平安海進」の時期にあたり、海水面の２ｍ以上の上昇が指摘されており（赤松ほか1998）、湖沼面積も現在より広かったと考えられている（右代1999）。本遺跡も段丘東側に湖沼や河川、北側に海岸線が迫る、水辺



（センサイ川の流形は国土地理院昭和51年発行の5万分の1地形図「中湧別」から復元）

図Ⅱ－１　遺跡の位置と周辺の地形



図Ⅱ－2　川西地区三遺跡の竪穴分布

に接した環境であった可能性が考えられる。こうした周辺環境の正確な復元については、今後地質調査などを実施して確認していく必要があるだろう。

遺跡の現況は雑木に覆われた林地であり、地権者によればこのあたりは、戦前は軍馬の育成牧場、戦後は牛の放牧場として利用された後、長く放置され現在に至っている。遺跡の西側にはシブノツナイ町営牧野に通じる道路が作られており、戦後農協が道路拡幅工事を行った際に竪穴の一部が埋められた様子が認められる。但し遺跡全体の遺存状況は良好で、竪穴が現存する範囲については大きな地形の改変などは行われずに保存されているようである。

⑵　周辺の遺跡（図Ⅱ－１）

湧別町では平成30年４月現在で56か所の遺跡が登載されている。本遺跡が所在する川西地区には４か所の遺跡（川西２遺跡、シブノツナイ竪穴住居群、川西遺跡、川西オホーツク遺跡）があり、この内、北からシブノツナイ竪穴住居群、川西２遺跡、川西オホーツク遺跡がセンサイ川左岸沿いに位置する。これら３か所の遺跡は400ｍほどの間隔で連なり、各遺跡とも竪穴群がみられることから、昭和41年調査時には一連の遺跡と認識されていた。

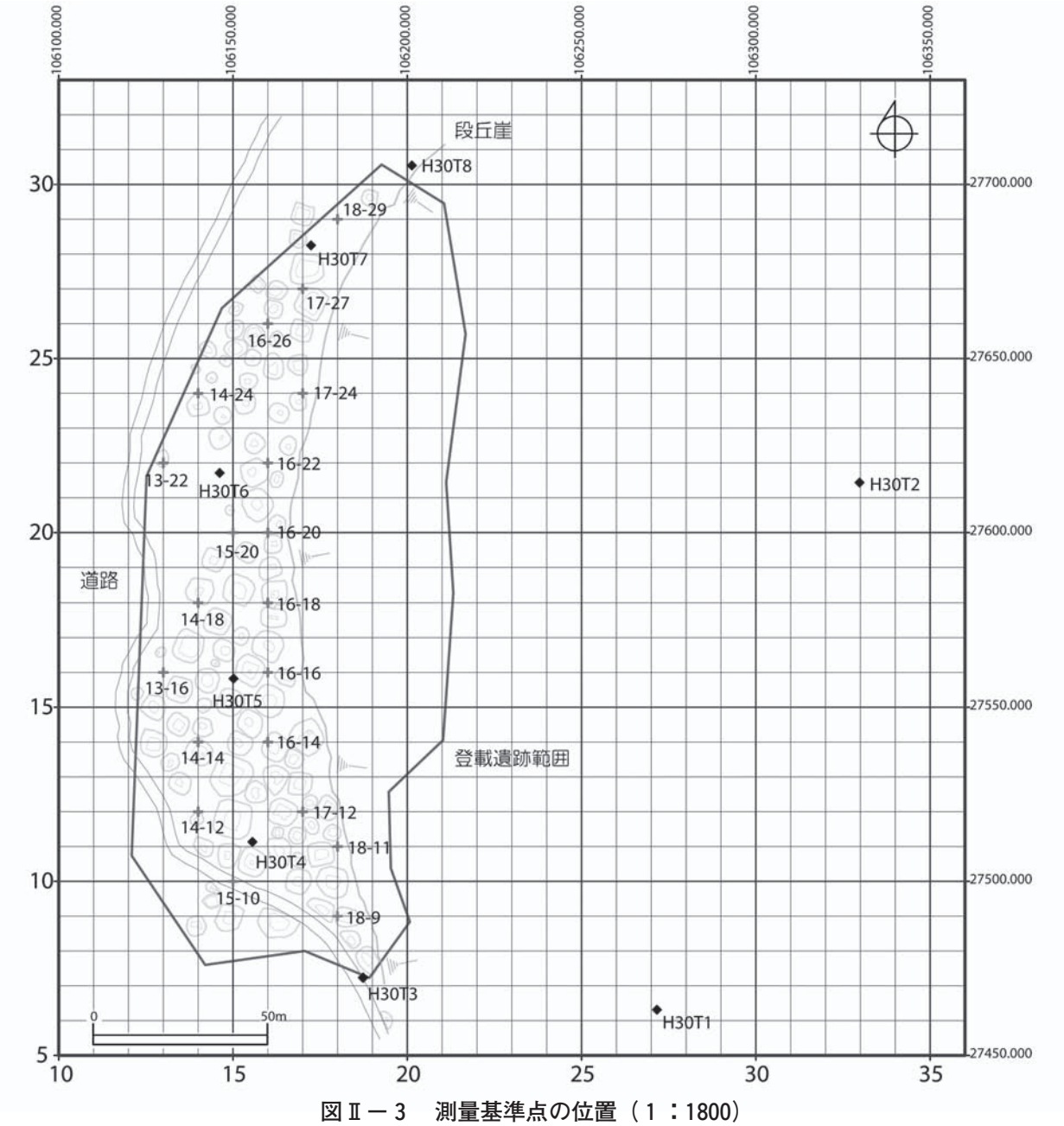
シブノツナイ竪穴住居群は昭和38年に網走市立郷土博物館の米村哲英氏、昭和41年に北海道大学大場利夫氏により調査が行われ、５か所の擦文文化期の竪穴住居跡が発掘されている。また、平成27～29年度には北海道立埋蔵文化財センターが測量調査を実施し、竪穴530か所の詳細分布図を作成した。さらに、湧別町教育委員会が所蔵するシブノツナイ竪穴住居群出土の擦文文化後期を主体とする遺物についても写真撮影・図化などの資料化を行っている。

川西オホーツク遺跡は昭和35年及び平成３～５年に発掘調査が行われている。昭和35年の調査は米村喜男衛氏により「川西遺跡」として実施され、オホーツク文化期の竪穴２軒と擦文文化期の竪穴１軒を発掘し、オホーツク文化期の住居跡からは骨牙製とみられるクマや海獣の彫像が出土している。平成３～５年の調査は道立北方民族博物館が実施し、オホーツク文化期の竪穴９軒（内１軒は昭和35年調査竪穴）を発掘し、貼付浮文を主体とするオホーツク式土器、黒曜石製石器、銛先・骨刀を含む骨角器などが出土している。

また、シブノツナイ湖西側の段丘上には沼の上遺跡、シブノツナイ遺跡が位置する。後者は縄文時代前期後半のシュブノツナイ式土器の標識遺跡であるが、擦文文化期の遺物も確認されている。また、シブノツナイ湖の南西側にはシブノツナイ川の段丘上にシブノツナイ２遺跡が立地しており、平成25年度に公益財団法人北海道埋蔵文化財センターによって調査が行われ、縄文時代前期後半から中期の遺物の出土が報告されている（北埋調報316）。湧別川の右岸側に位置する湧別市川遺跡は縄文時代早期の石刃鏃文化の遺跡として著名であり、北海道大学（昭和33年）、札幌大学（昭和48年）、湧別町教育委員会（昭和49・59年）、東京大学（平成25年）が発掘調査を実施している。

⑶　北海道東部の竪穴住居跡群調査について

北海道教育員会では北海道東部を中心に分布する窪みで残る竪穴群について、将来的な世界文化遺産登録も視野に入れた積極的な保存及び活用を推進するため、平成27年度より「北海道東部の竪穴住居跡群調査」を進めている。その中で重要遺跡確認調査は「個別調査」に位置付けられ、北海道教育委員会が主催する「北海道東部の竪穴住居跡群調査懇談会」で調査成果などを報告し、調査方針の指導・助言を受けている。また北海道立埋蔵文化財センターではこうした調査活動に連動して、道東地域所在の市町村教育委員会や博物館などが主催する一般市民向け講座・講演会などにも積極的に協力



図Ⅱ－3　測量基準点の位置（1：1800）

し、道東部竪穴群の普及・啓蒙を推進している。

3　調査の方法

⑴　測量調査（図Ⅱ－3）

ア．基準点測量と基準方眼杭の打設

基準点測量作業は㈱シン技術コンサルに委託し、基準点（8箇所）と基準方眼杭（20箇所）の打設、水準測量を実施した。基準点はGNSS測量による3級を2箇所（H30T1・H30T2）、トラバース測量による4級を6箇所（H30T3～H30T8）打設した。水準測量は遺跡南側に位置する一等水準点を使用した。

今年度設置した杭の座標値（全て世界測地系ⅩⅡ系）は次のとおりである。

〈基準点測量〉

H30T1（X＝27463.123　Y＝106271.632）　H30T2（X＝27614.373　Y＝106329.763）
H30T3（X＝27472.331　Y＝106187.318）　H30T4（X＝27511.325　Y＝106155.563）
H30T5（X＝27558.218　Y＝106150.148）　H30T6（X＝27617.134　Y＝106146.167）
H30T7（X＝27682.494　Y＝106172.377）　H30T8（X＝27705.438　Y＝106201.316）

〈基準方眼杭〉

杭の名称は「南北ライン－東西ライン」で表され、当該名称は基準杭北東側の調査区（グリッド）の名称となっている。

13-16（X＝27560.000　Y＝106130.000）　13-22（X＝27620.000　Y＝106130.000）
14-12（X＝27520.000　Y＝106140.000）　14-14（X＝27540.000　Y＝106140.000）
14-18（X＝27580.000　Y＝106140.000）　14-24（X＝27640.000　Y＝106140.000）
15-10（X＝27500.000　Y＝106150.000）　15-20（X＝27600.000　Y＝106150.000）
16-14（X＝27540.000　Y＝106160.000）　16-16（X＝27560.000　Y＝106160.000）
16-18（X＝27580.000　Y＝106160.000）　16-20（X＝27600.000　Y＝106160.000）
16-22（X＝27620.000　Y＝106160.000）　16-26（X＝27660.000　Y＝106160.000）
17-12（X＝27520.000　Y＝106170.000）　17-24（X＝27640.000　Y＝106170.000）
17-27（X＝27670.000　Y＝106170.000）　18-9　（X＝27490.000　Y＝106180.000）
18-11（X＝27510.000　Y＝106180.000）　18-29（X＝27690.000　Y＝106180.000）

イ．竪穴詳細測量の方法

竪穴の詳細測量は平成27～29年度にシブノツナイ竪穴住居群で実施した方法を踏襲し、トータルステーションを用いた。測量作業は４名の作業員を２名ずつ２班に分け、各班で機械操作とターゲット保持の役割分担をした。また日々の測量作業記録として作業日時、対象（竪穴番号など）、測量種類（記録レイヤ番号）、測量内容（上端・下端など）、使用基準杭、後視点、機械高、ミラー高、測点数などの情報を野帳に記載した。

詳細測量は基本的に、上端ライン（20か所）、下端ライン（10か所）および下面端点（最も低いところ１点）を記録することとしたが、測点数は状況に応じて変更した場合もある。方形の上端測点は、四つ角の頂点と各近接する２点（計12点）、及び各頂点間の２点（計８点）を基本とした。円・楕円形の測点は概ね均等に配置しつつ形状を把握できるように心掛けた。

また任意の竪穴について断面図（エレベーション図）の測量を行った。測量方法は竪穴の中央部を通る２本の直交ラインを、メジャーを設置して示し、トータルステーションを用いて50～100cm間隔で計測した。

このほか、竪穴観察で「下端の凹み」が認められた場合も測量を行った。「下端の凹み」は遺構略称を「HP」とし、上端形状測量と最深部１点の端点測量を行った。付属遺構名称は竪穴単位で連続番号を付した。

ウ．測量データの管理

測量したデータは日中の作業終了後、毎日ハードディスクに転送・保管し、上記した野帳の作業記録と照合してデータに遺漏がないかを確認した。さらに遺跡管理システム（株式会社シン技術コンサル）を用いてコンピュータ上で図面展開し、測量内容に異常がないかを確認した。異常がみられた場合は隋時原因を確認して翌日の作業に支障が出ないよう努め、再測量の指示と作業点検の励行などを

行った。

⑵　竪穴観察

ア．竪穴の認定

竪穴の認定には、下端中央部付近に４～５か所程度ピンポールを刺し一定の深さが確認されたものを認定する方法を用いた。50cm以上の明瞭な窪みをもつ竪穴では30～40cm程度ピンポールが刺さる状況が普遍的にあり、また竪穴外の平坦面では20cm程度しか刺さらなかった。このため認定は下端から深さ30cm以上ピンポールが刺さるかを判断基準とした。

イ．観察項目

竪穴の詳細測量と並行し「平面形状」、「下端盛土」、「下端凹み」、「下端礫」、「埋没礫」、「掘上げ土投げ込み」について観察・記録した。

「平面形状」は竪穴構築時期の推定を目的として、円形（楕円形）、柄鏡形、多角形、方形（長方形）のいずれかに分類した。分類は現地観察・測量図面・写真の各情報から総合的に判断した。

「下端盛土」は盗掘もしくは発掘調査の排土の可能性がある大きさ数mほどの小規模な盛土で、シブノツナイ竪穴住居群で確認されたため、本遺跡でも観察対象としたが、明確なものはみられなかった。

「下端凹み」は大きさ0.5m前後で主に方形を呈する凹みで、下面中央付近に位置することが多く、シブノツナイ竪穴住居群の調査成果から盗掘坑の可能性を想定している。また凹み範囲についてはトータルステーションによる測量を実施した。

「下端礫」は大きさ10～40cm程度の礫の分布で、石組炉の礫の露出を想定している。また「埋没礫は」下面中央付近をピンポールで４～５か所程度刺して埋没状況を確認した。

「掘上げ土投げ込み」は一方向の壁沿いに偏って分布する盛土で、近隣竪穴から掘上げ土が投げ込まれた状況を想定している。記録は竪穴内の大まかな盛土分布範囲と推測される掘上げ土の排出竪穴について行い、竪穴間の新旧を考察する情報とした。

この他、「不明瞭」、「風倒木痕に近接する」など竪穴の認定に再検討を要するものについても記録した。これらの情報は表Ⅱ－６確認竪穴一覧に記載した。

ウ．竪穴の属性分類について

竪穴の属性観察については、平面形状、規模、深さの３項目に関して分類を行い集計した。平面形の分類は略形状である円形・方形・多角形の３形状とした。規模・深さの分類内容については表Ⅱ－１・２に示した。

表Ⅱ－１　竪穴規模の分類

規模（面積基準）	長軸目安	分類
5㎡未満	2m前後	極小
5～10㎡未満	3m前後	小
10～30㎡未満	4～5m前後	小－中
30～50㎡未満	6～7m前後	中
50～70㎡未満	8m前後	中－大
70～90㎡未満	9m前後	大
90～110㎡未満	10m前後	特大
110㎡以上	11m前後	超特大

表Ⅱ－２　竪穴深さの分類

深　さ	分類
0.3m未満	特に浅い
0.3～0.5m未満	浅い
0.5～0.8m未満	やや深い
0.8～1.0m未満	深い
1.0m以上	特に深い

⑶　写真撮影

現地での写真撮影にはデジタルカメラ（シグマ dp0クワトロ及びソニー DSC-RX0）を使用した。

⑷　関連資料調査

関連資料調査は湧別町郷土資料館所蔵の遺物を対象に行った。

遺物は川西２遺跡に隣接する畑地で表面採集された土器片で、分類・観察、図化、写真撮影を行い、本書に掲載した。

４　調査の成果

⑴　測量成果

本年度は測量を主体に調査を実施した。具体的には竪穴詳細測量、断面状況測量、地形測量で、測量成果を図Ⅱ－４～６（平面図）・11～17（エレベーション図）に図示した。また竪穴の規模と観察結果について表Ⅱ－６「確認竪穴一覧」に掲載した。竪穴規模は遺跡管理システム上に展開した測量図面から計測し、さらに得られた計測値や属性を遺跡管理システムの台帳に追加入力することで属性別分布の図面展開を可能とした。

本年度確認した竪穴の総数は102か所で、センサイ川によって形成された段丘崖縁辺部に沿って張り付くように、南北約250m×東西約50mの範囲のうち約8,500㎡に密集する。現地調査では竪穴分布がさらに広がる可能性を想定し、主にシブノツナイ竪穴住居群との間の周辺踏査を行ったが新たな竪穴の分布を確認することはできなかった。少なくとも遺跡の北西側に竪穴が広がる可能性は低く、シブノツナイ竪穴住居群の竪穴群とは不連続であると考えられる。また周辺状況からも、今後川西２遺跡の竪穴数が102か所から大きく増加することはないと思われる。

川西２遺跡の竪穴群が立地する台地上は西から東、南から北への非常に緩やかな傾斜があるものの、概ね平坦で、現地で傾斜を感じることは殆どない。東側の段丘崖下は低湿部であり一部畑地に利用されている。台地と低湿部との比高は2.5～3.5mほどで、東－西20ライン付近で最も差が大きい（図Ⅱ－４）。また竪穴分布範囲の北側では徐々に台地が低くなり低湿部との比高が小さくなっている。

竪穴の分布は東－西20ラインで希薄になるため南北に分離することができ、「北エリア」と「南エリア」に区分した。本節２項「竪穴観察」で詳述するが、南北で異なる特徴が認められる。北エリアは円形・方形、規模４～５ｍ、深さ0.5m未満の小型で浅いものを主体とし、分布密度が相対的に低い。南エリアは方形・多角形、規模６～８ｍ、深さ0.5m以上の大型で深めのものを主体とし、分布密度が相対的に高い。南北で対照的な内容がみられる。

⑵　竪穴観察

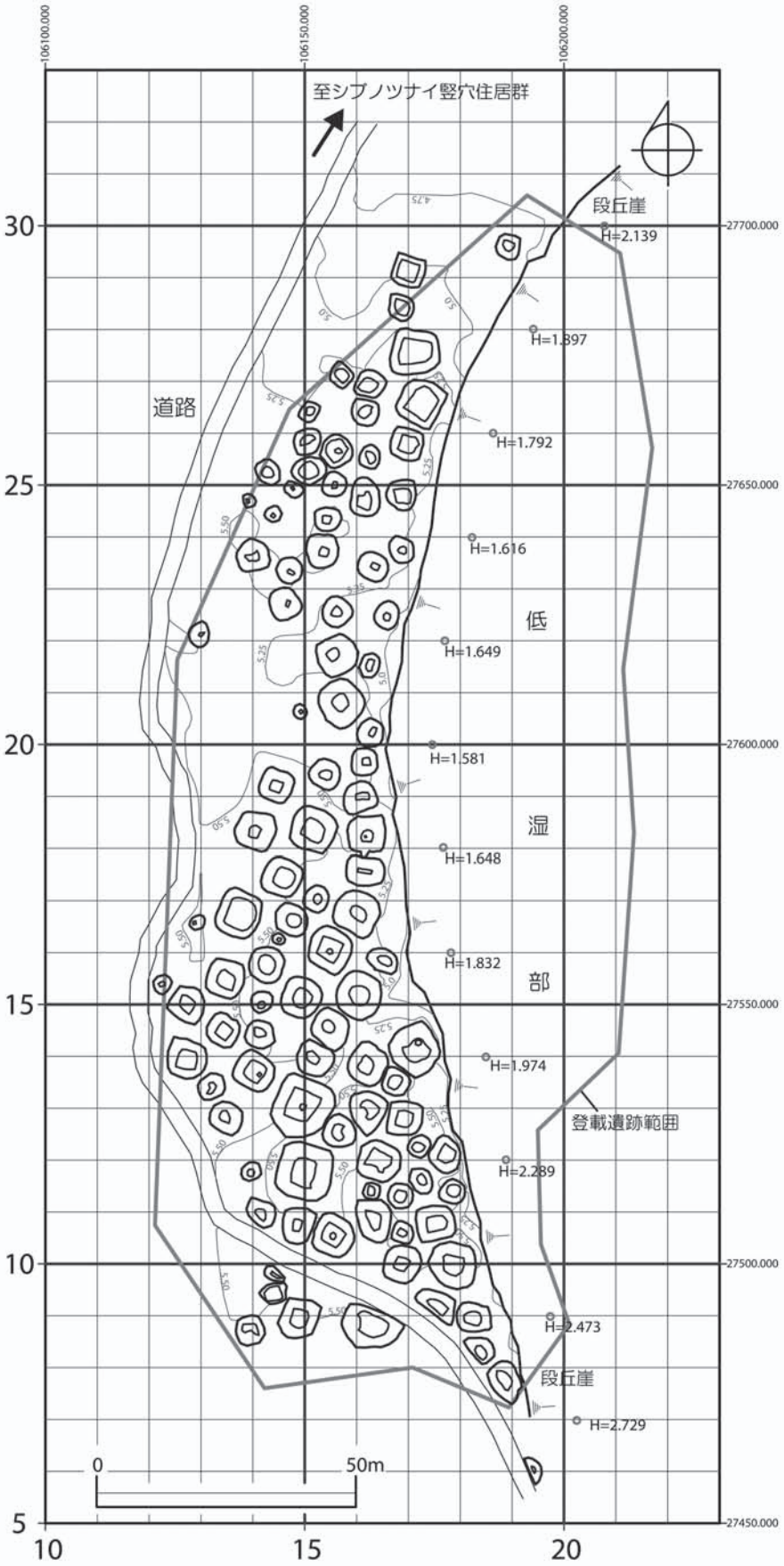
属性別の集計結果について傾向を確認し、さらに各属性の分布状況を観察する。

ア．属性別集計結果

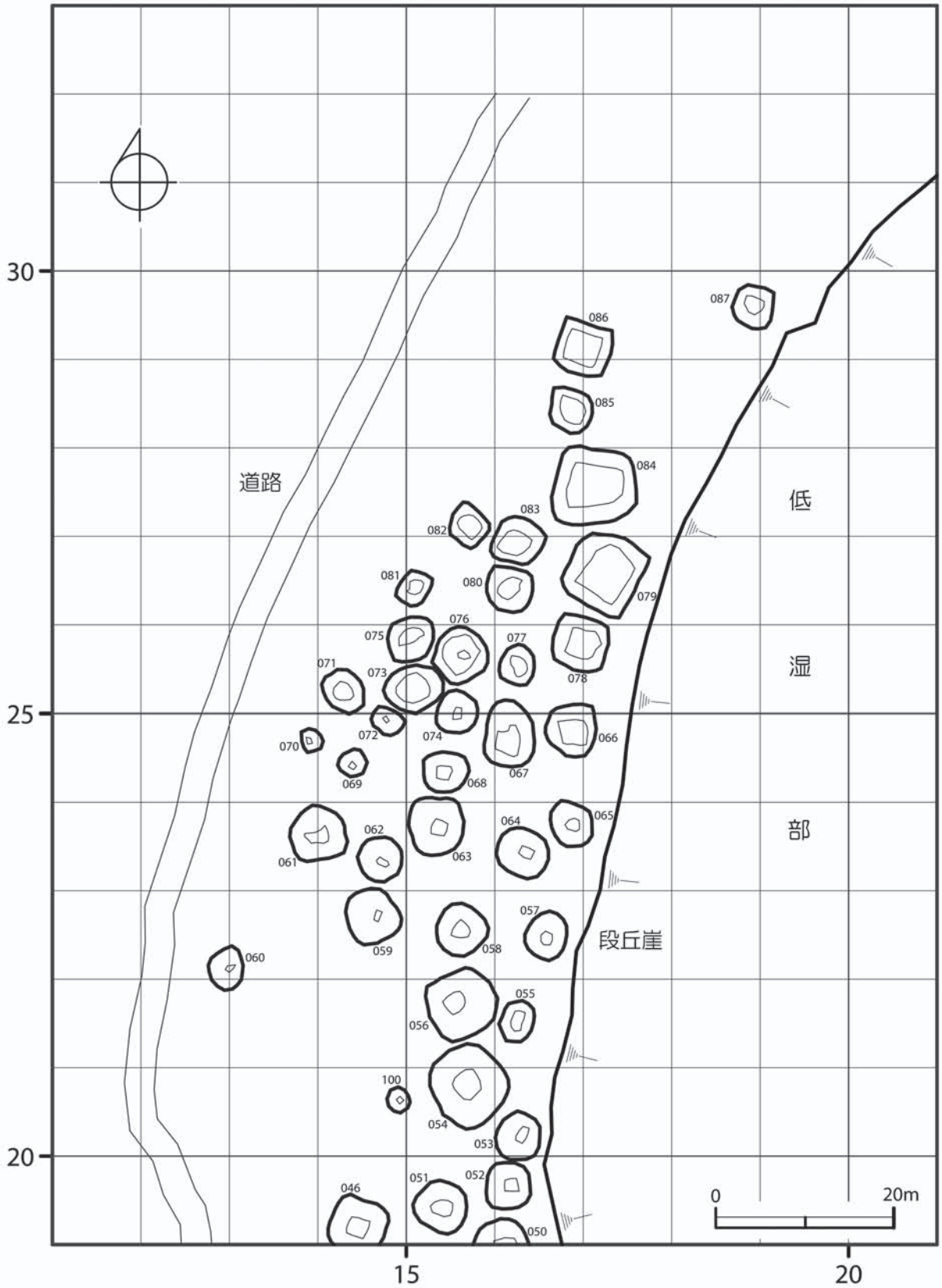
形状・規模・深さの項目について集計を行った。上述のように南北で分布傾向の違いが看取できることから、「遺跡全体」・「北エリア」・「南エリア」に区分し、集計結果を表Ⅱ－３と図Ⅱ－７に示した。以下、遺跡全体と各エリア別に時期推定が可能な「形状」を中心に詳述する。

【遺跡全体】

形状は円形と方形が主体で、それぞれ４割ほどを占める。多角形は２割程度だが21軒と一定数存在



図Ⅱ－4　川西２遺跡竪穴分布状況（全体　1：1300）



図Ⅱ－５　竪穴詳細分布図（北エリア　１：650）

図Ⅱ－6　竪穴詳細分布図（南エリア　1：650）

する（図Ⅱ－７－１）。規模は円形が小－中型（４～５ｍ）以下のもの、多角形・方形が中型（６～７ｍ）以上のものを主体としている。深さは円形が0.5m未満の浅いもの、方形が0.5m以上の深いものが多く、多角形は0.5m以上の深いもので占められる（図Ⅱ－７－２）。このため遺跡は主に縄文時代・続縄文文化期（円形）と擦文文化期（方形）に形成され、オホーツク文化期（多角形）にも集落が営まれた可能性がある。また続縄文文化期以前は小型で浅い竪穴を、オホーツク文化期と擦文文化期には大型で深い竪穴を構築したことが考えられるが、前者は埋没が進行したことが関係しているかもしれない。

【北エリア】

形状は円形が主体で６割以上におよび、次いで方形が３割ほどを占める。多角形は１割未満と少なく後述のように本エリアの南端に分布する（図Ⅱ－８）。このため多角形は南エリアに連続するもので北エリアでは分布が希薄である。

規模は主体となる円形では長軸５ｍ以下の小～小－中型が大半を占める。方形は小－中型～大型までみられ多様だが、やはり円形と同様に５ｍ以下の小－中型が多数を占める（図Ⅱ－７－３）。

深さは円形・多角形とも規模に比例して深くなる傾向がみられ、小型が主体なことから浅いものが多い。対して方形は大きさに関わりなく浅いものが主体で特徴的である(表Ⅱ－３・図Ⅱ－７－５)。

区域全体では円形が多く、規模５ｍ以下の小ぶりで、深さ0.5m未満の浅めの竪穴が主体であり、北エリアを特徴づけている。

【南エリア】

形状は方形が主体で５割近くを占め、円形と多角形が３割弱ずつみられる。上述した北エリア南端の多角形竪穴を考慮すれば、多角形21軒は遺跡南半部にまとまる。

規模は主体となる方形と多角形で６ｍ以上の中～中－大型が大半を占めている。円形は５ｍ以下の小－中以下が多く、北エリアと同様の傾向が認められる（図Ⅱ－７－４）。

深さは全ての形状で規模と比例して深くなる傾向が認められ（表Ⅱ－３）、区域全体としては「やや深い」以上（深さ0.5m～）のものが主体となり、0.8m以上も多数みられる（図Ⅱ－７－６）。

区域全体では方形・多角形が多く、規模６ｍ以上の大ぶりで、深さ0.5m以上の深めの竪穴が主体となり、南エリアを特徴づけている。

イ．属性別分布状況

形状・規模・深さの属性ごとに分布状況を観察した（図Ⅱ－８～10)。

【形状別分布】

円形は大きく南北エリアに分かれて分布している。北エリアでは東－西25ライン付近に極小～中型が密集して分布する。対して南エリアでは同規模のものがやや散発的な分布をみせる。

多角形は東－西20ライン付近以南に特徴的に分布する。

方形は大まかに①東－西25ライン以北、②東－西15～20ライン付近、③東－西15ライン以南の３つのまとまりに区分が可能である。各まとまりとも竪穴同士が非常に近接し、特に②の段丘縁付近では南北に連なる特徴的な分布が認められる。

【規模別分布】

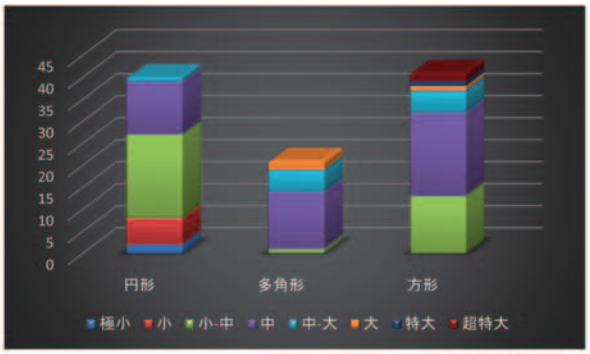
規模別の分布状況を形状ごとに色分けをして示した（図Ⅱ－９）。

「極小・小型」は全て円形で、全体に散発的な分布だが、東－西15・25ライン付近に小規模にまとまる（図Ⅱ－９－１）。

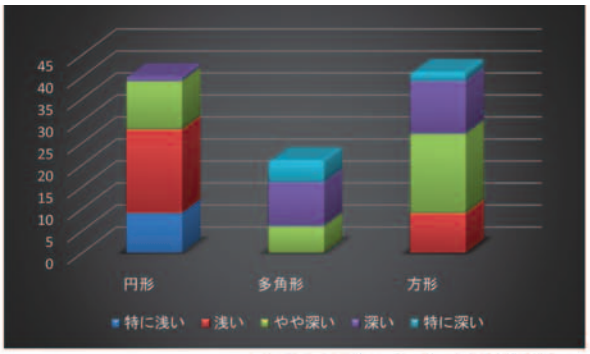
「小－中型」は円形と方形が主体で、両形状とも南北に広く分布する。特に円形のものが北エリア

表Ⅱ－3　竪穴集計結果

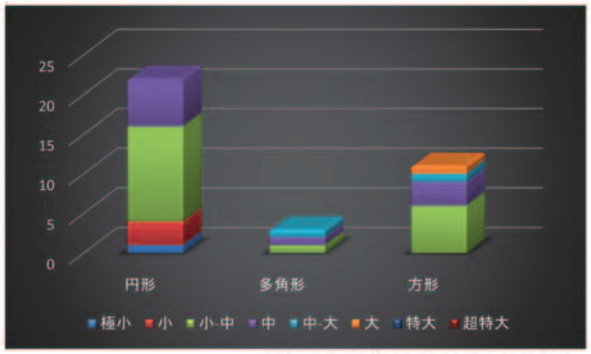
			特に浅い（～0.3m）	浅い（0.3～0.5m）	やや深い（0.5～0.8m）	深い（0.8～1.0m）	特に深い（1.0m～）	総計 軒数	総計 形状内比率	総計 全体比率
北エリア	円形	極小（2m前後）	1					1	4.5%	2.8%
		小（3m前後）	2	1				3	13.6%	8.3%
		小－中（4～5m前後）	1	9	2			12	54.5%	33.3%
		中（6～7m前後）		3	3			6	27.3%	16.7%
		計	4	13	5			22	100.0%	61.1%
	多角形	小－中（4～5m前後）			1			1	33.3%	2.8%
		中（6～7m前後）				1		1	33.3%	2.8%
		中－大（8m前後）					1	1	33.3%	2.8%
		計			1	1	1	3	100.0%	8.3%
	方形	小－中（4～5m前後）		4	2			6	54.5%	16.7%
		中（6～7m前後）		1	2			3	27.3%	8.3%
		中－大（8m前後）		1				1	9.1%	2.8%
		大（9m前後）		1				1	9.1%	2.8%
		計		7	4			11	100.0%	30.6%
	北エリア計		4	20	10	1	1	36	35.3%	
			11.1%	55.6%	27.8%	2.8%	2.8%			
南エリア	円形	極小（2m前後）		1				1	5.6%	1.5%
		小（3m前後）	1	2				3	16.7%	4.5%
		小－中（4～5m前後）	4	1	2			7	38.9%	10.6%
		中（6～7m前後）		2	3	1		6	33.3%	9.1%
		中－大（8m前後）			1			1	5.6%	1.5%
		計	5	6	6	1		18	100.0%	27.3%
	多角形	中（6～7m前後）			5	6	1	12	66.7%	18.2%
		中－大（8m前後）				3	1	4	22.2%	6.1%
		大（9m前後）					2	2	11.1%	3.0%
		計			5	9	4	18	100.0%	27.3%
	方形	小－中（4～5m前後）		1	6			7	23.3%	10.6%
		中（6～7m前後）		1	7	7	1	16	53.3%	24.2%
		中－大（8m前後）				4		4	13.3%	6.1%
		特大（10m前後）					1	1	3.3%	1.5%
		超特大（11m前後）			1	1		2	6.7%	3.0%
		計		2	14	12	2	30	100.0%	45.5%
	南エリア計		5	8	25	22	6	66	64.7%	
			7.6%	12.1%	37.9%	33.3%	9.1%			
遺跡全体	円形	極小（2m前後）	1	1				2	5.0%	2.0%
		小（3m前後）	3	3				6	15.0%	5.9%
		小－中（4～5m前後）	5	10	4			19	47.5%	18.6%
		中（6～7m前後）		5	6	1		12	30.0%	11.8%
		中－大（8m前後）			1			1	2.5%	1.0%
		計	9	19	11	1		40	100.0%	39.2%
	多角形	小－中（4～5m前後）			1			1	4.8%	1.0%
		中（6～7m前後）			5	7	1	13	61.9%	12.7%
		中－大（8m前後）				3	2	5	23.8%	4.9%
		大（9m前後）					2	2	9.5%	2.0%
		計			6	10	5	21	100.0%	20.6%
	方形	小－中（4～5m前後）		5	8			13	31.7%	12.7%
		中（6～7m前後）		2	9	7	1	19	46.3%	18.6%
		中－大（8m前後）		1		4		5	12.2%	4.9%
		大（9m前後）		1				1	2.4%	1.0%
		特大（10m前後）					1	1	2.4%	1.0%
		超特大（11m前後）			1	1		2	4.9%	2.0%
		計		9	18	12	2	41	100.0%	40.2%
	総計		9	28	35	23	7	102	100.0%	
			8.8%	27.5%	34.3%	22.5%	6.9%			



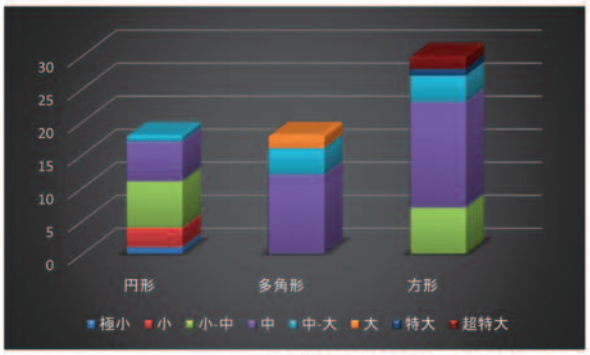
1. 平面形状×規模（遺跡全体）



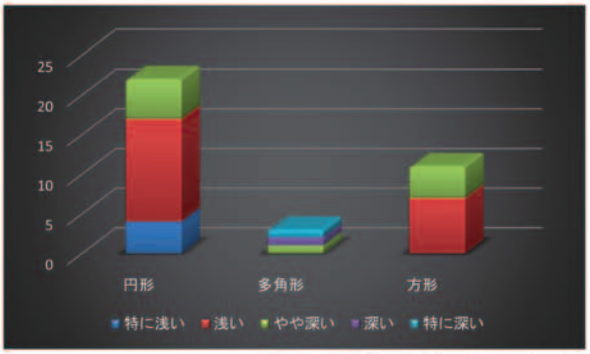
2. 平面形状×深さ（遺跡全体）



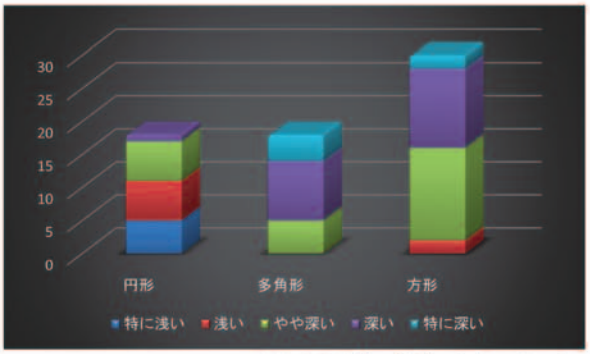
3. 平面形状×規模（北エリア）



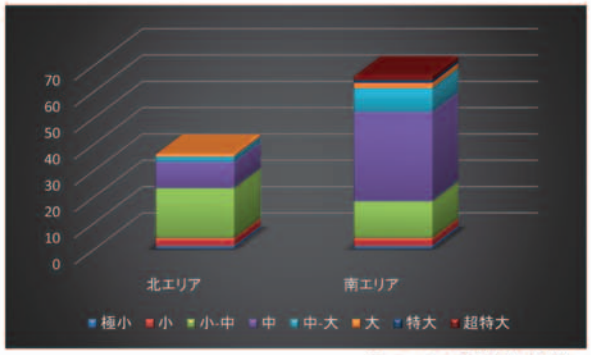
4. 平面形状×規模（南エリア）



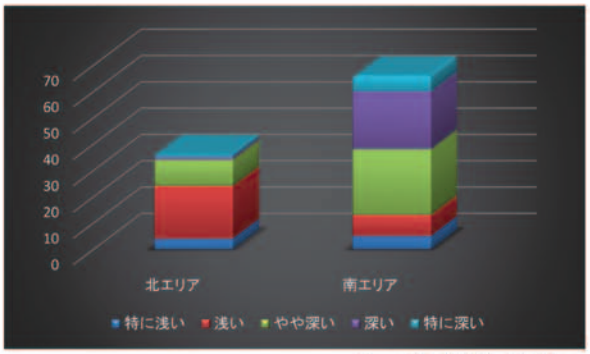
5. 平面形状×深さ（北エリア）



6. 平面形状×深さ（南エリア）



7. エリア別竪穴規模



8. エリア別竪穴深さ

図Ⅱ－７　竪穴属性集計結果

の東－西25ライン付近にまとまってみられる（図Ⅱ－９－２）。

「中型」は円形が北エリアの東－西25ラインに、方形と多角形が南エリアにまとまる。方形と多角形では前者が段丘縁付近、後者が段丘縁からやや離れた微高地に多く分布する傾向がある。特に多角形は東－西15ライン前後にまとまってみられる（図Ⅱ－９－３）。

「中－大型」は方形と多角形が主体で南エリアに多く分布し、特に方形は東－西15ライン付近に３軒がまとまってみられる。多角形は20～30mほどの間隔で南北に連なるように分布し、中型よりも段丘縁側に位置する特徴がみられる（図Ⅱ－９－４）。

「大～超特大型」は方形と多角形のみで、主に東－西15ライン以南にまとまってみられる。方形は段丘縁からやや離れた標高5.5m前後の微高地に、多角形は段丘縁辺に位置している(図Ⅱ－９－５)。

多角形は中－大型よりもさらに段丘縁側に位置し、全体として相対的に大きいものが段丘縁に近い範囲を選択する傾向が看取できる。対して方形は大～超特大が段丘縁から離れた南西側の微高地に位置する様子がみられ、規模別の分布傾向は形状により異なることが指摘できる。

さらに方形については、北エリアにも中－大型と大型の周辺竪穴のなかで大きいものが近接して分布する様子が注目される(竪穴79・84)。同様に南部でも超特大・特大の２軒が近接する状態があり、大きな竪穴のまとまりが南北に配置される状況がみてとれる。

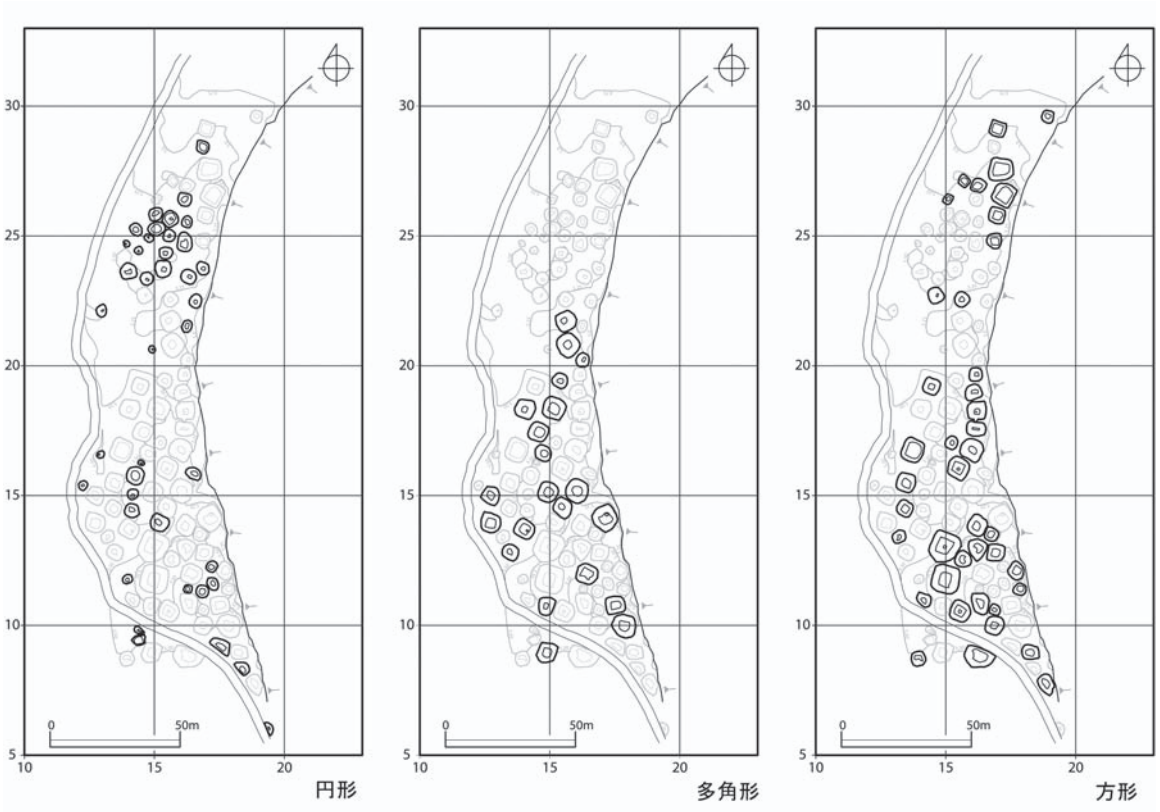
【深さ別分布】

規模別の分布状況を形状ごとに色分けをして示した（図Ⅱ－10)。

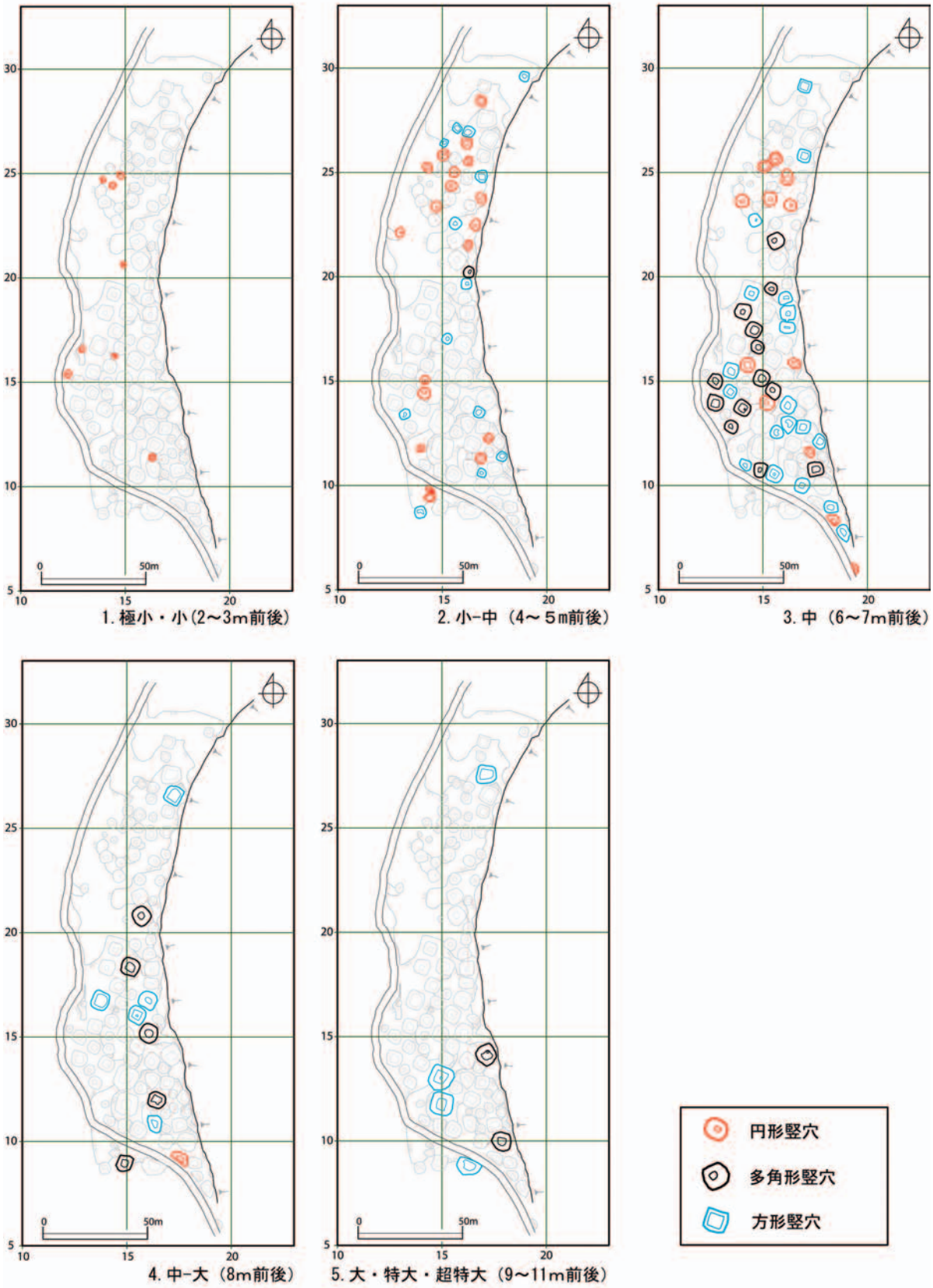
「特に浅い」は円形の極小～小－中型で占められ、分布は遺跡全体に散発的に認められる。

「浅い」は北エリアの円形・方形が主体で、特に東－西25ライン以北に密に分布する。円形が北エリア内南側、方形が北側に位置する傾向がある。南エリアでは円形と方形が散発的に分布している。

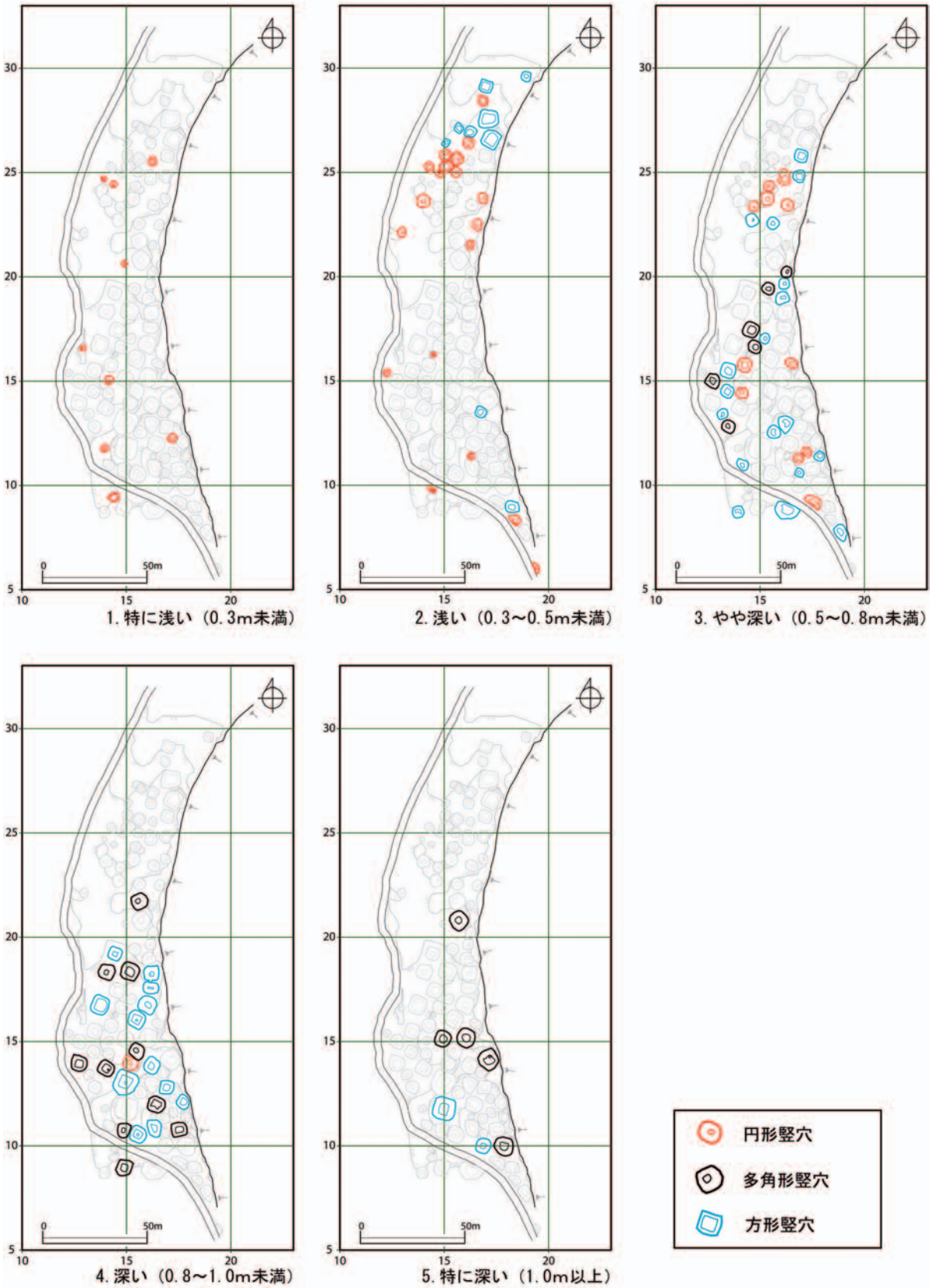
「やや深い」は規模の中型に該当するものが多数を占め、その分布傾向に近い。遺跡全体では主に



図Ⅱ－８　形状別竪穴分布状況



図Ⅱ－９　規模別竪穴分布状況



図Ⅱ－10　深さ別竪穴分布状況

東－西25ライン以南の分布となり、浅いものに比べ南側に位置する傾向がある。北エリアでは円形・方形の浅い～やや深いが東－西25ライン前後にまとまり、同区域の特徴となっている。南エリアでは浅いものに比べやや深いものが増加しており多角形・方形が目立つ。

「深い」・「特に深い」は規模中型以上の多角形・方形で主に構成される。東－西20ライン以南に分布がほぼ限定され、深い竪穴が南エリアの特徴となっている。また、特に深いものはさらに東－西15ライン以南にまとまるため、深いものほど南側に偏る傾向が指摘できる。

ウ．竪穴断面形状

竪穴のエレベーション図を図Ⅱ－11～17に示した。深さを中心に観察していく。上述のように深さは竪穴規模に比例する傾向あり、断面形状も概ね相似形で認められるが、大型で深いものほど下端面から壁面への立ち上がりが明瞭になるなどの様子がみられた。埋没状況が影響していることが考えられる。

「特に浅い」は竪穴93（図Ⅱ－13）で観察できるように皿状を呈し、窪みがやや不明瞭なものを含んでいる。

「浅い」は竪穴80・86（図Ⅱ－11・12）で観察できるように皿状から浅鉢状を呈し緩やかな窪みとして認められる。

「やや深い」は図Ⅱ－11～16で観察できるように、浅鉢状を呈し壁面の立ち上がりの様子が認められるようになる。

「深い」・「特に深い」は中型以上の多角形・方形が主に該当し、図Ⅱ－14～17で観察できるように下面から壁面の立ち上がりが明瞭に観察できるようになる。また竪穴６（図Ⅱ－16）や竪穴33（図Ⅱ－15）の様に中型で特に深いボウル状のものも認められる。

エ．掘上げ土の投げ込み状況

一部の竪穴において、竪穴の一方の壁に偏って堆積する盛土状の高まりを確認した。同様の状況は過年度調査のシブノツナイ竪穴住居群でも認められ、近接竪穴から排出された掘上げ土の投げ込みと捉えた（重要遺跡確認調査報告書13集）。本報告でも同様に、掘上げ土の分布状況から排出竪穴を推測して竪穴間の新旧関係を把握した。掘上げ土の投げ込みは遺跡全体で13か所（排出と被投げ込みの関係は15例）確認され、観察結果を表Ⅱ－４と図Ⅱ－18に示した。

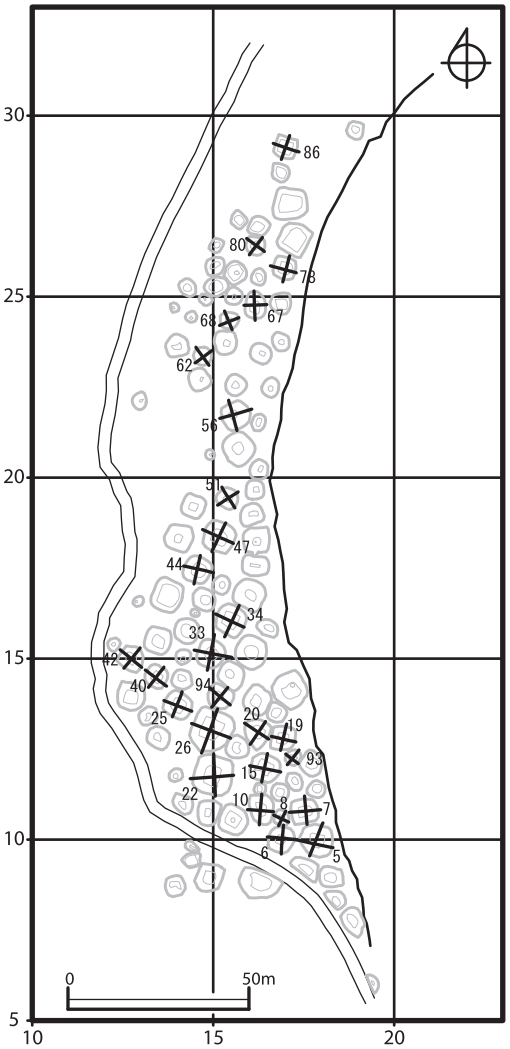
分布は南エリアに集中的にみられ、主に中型以上の竪穴で観察される。形状間の関係では、方形から方形もしくは他の形状に排出された例が最も多く10例あり、特に方形→方形、方形→多角形への投げ込みが目立つ。方形が最も新しい擦文文化期の所産である想定と整合する。また円形→円形も２例みられ、15例中12例については形状から推測される竪穴構築時期と整合的である。但し、整合しない例（円形→方形［竪穴14→15］、円形→多角形［竪穴94→27］、多角形→方形［竪穴32→27］）も少数みられ、排出竪穴や平面形状判断の誤認などが原因と考えられる。

表Ⅱ－４　掘上げ土竪穴の関係

		被掘上げ土投げ込み竪穴の形状			総　計
		円　形	多角形	方　形	
掘り上げ土排出竪穴の形状	円　形	2	1	1	4
	多角形			1	1
	方　形	1	3	6	10
総　　計		3	4	8	15

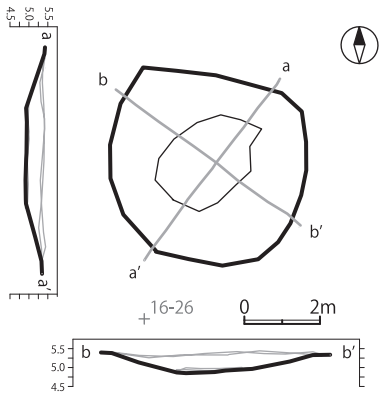
表Ⅱ－５　礫確認竪穴と竪穴形状

	埋没礫	下面礫	総　計
円　形	2	1	3
多角形	1	1	2
方　形	1		1
総 計	4	2	6

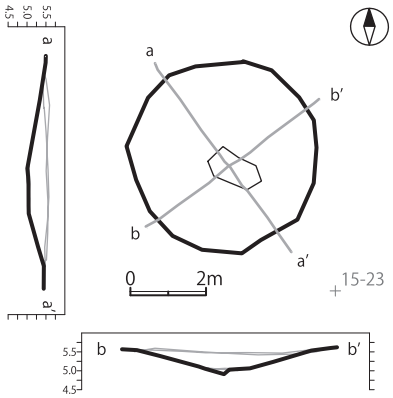


エレベーション測量竪穴の位置

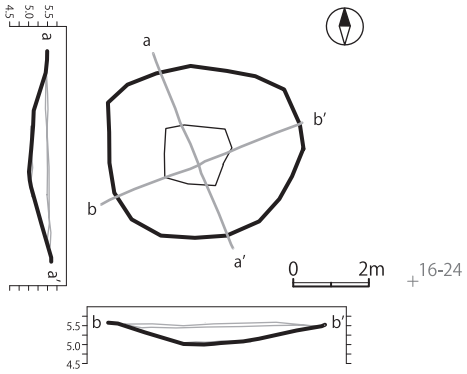
竪穴080　（北部 円形 小ー中型 浅い）



竪穴062　（北部 円形 小ー中型 やや深い）



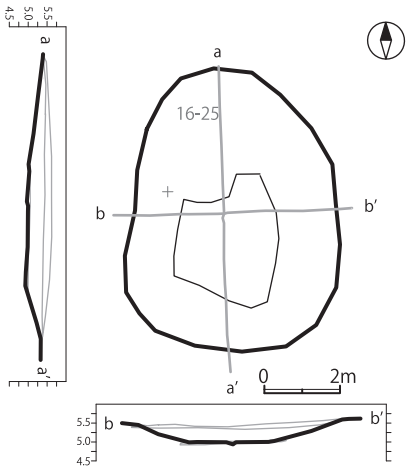
竪穴068　（北部 円形 小ー中型 やや深い）



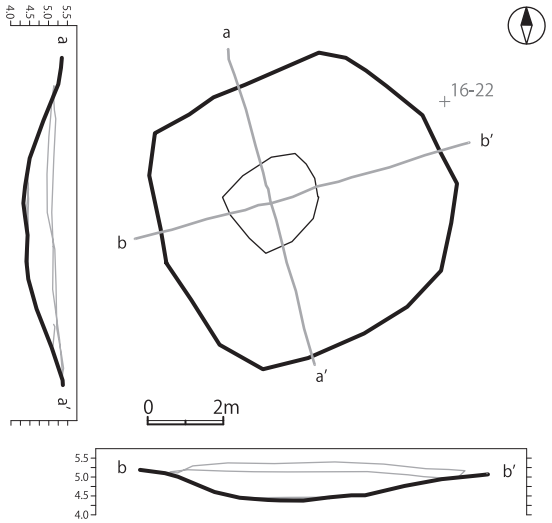
縮尺1：200

図Ⅱ－11　竪穴エレベーション図(1)

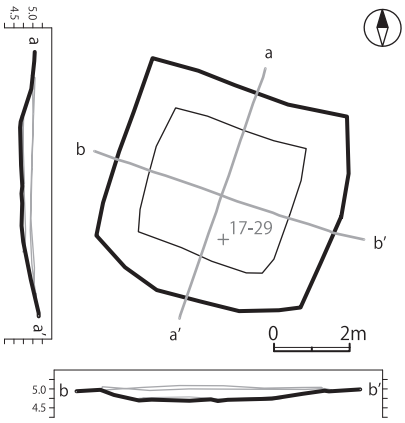
竪穴067　（北部 円形 中型 やや深い）



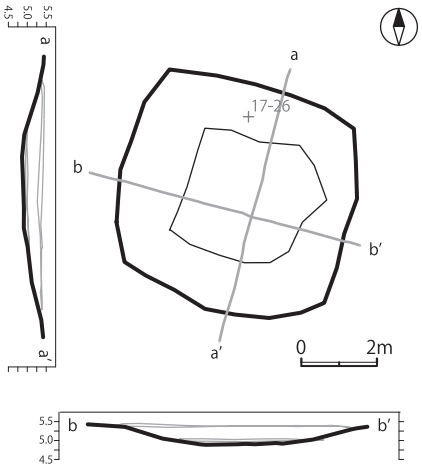
竪穴056　（北部 多角形 中型 深い）



竪穴086　（北部 方形 中型 浅い）



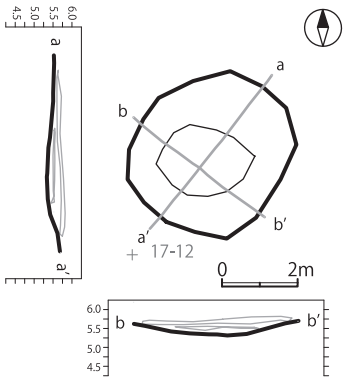
竪穴078　（北部 方形 中型 やや深い）



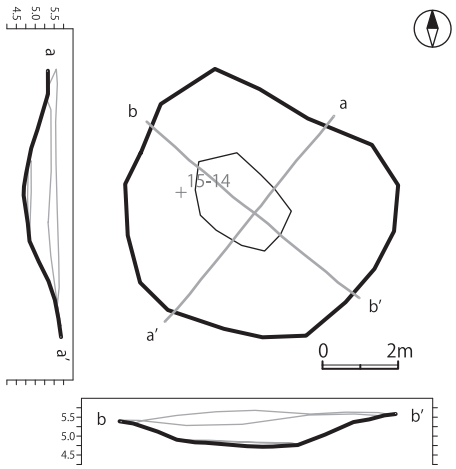
縮尺1：200

図Ⅱ－12　竪穴エレベーション図(2)

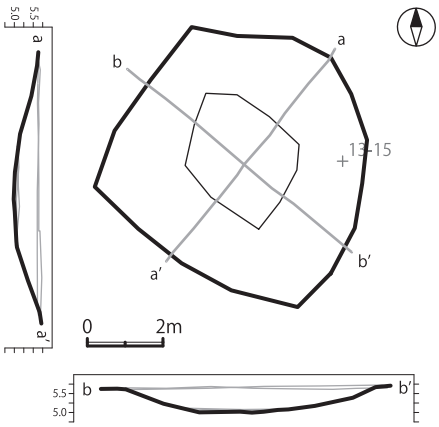
竪穴093　（南部 円形 小ー中型 特に浅い）



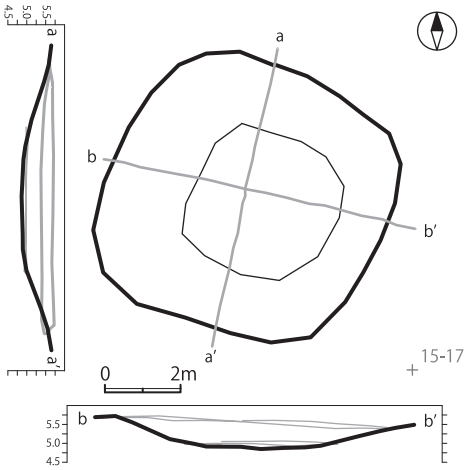
竪穴094　（南部 円形 中型 深い）



竪穴042　（南部 多角形中型 やや深い）



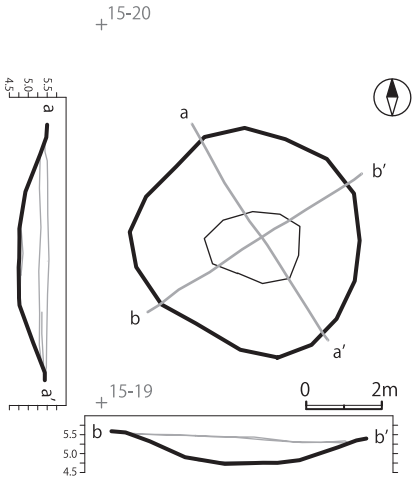
竪穴044　（南部 多角形 中部 やや深い）



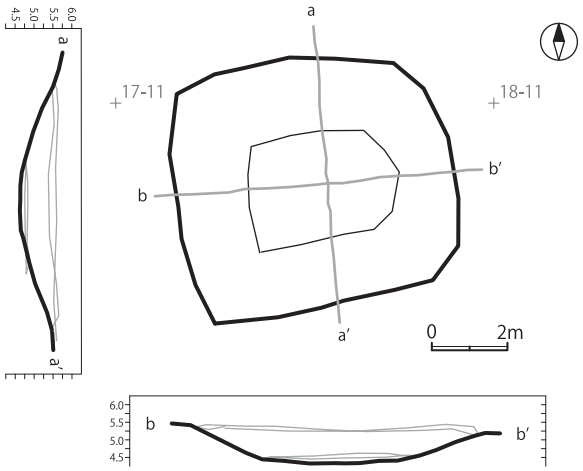
縮尺1：200

図Ⅱ－13　竪穴エレベーション図(3)

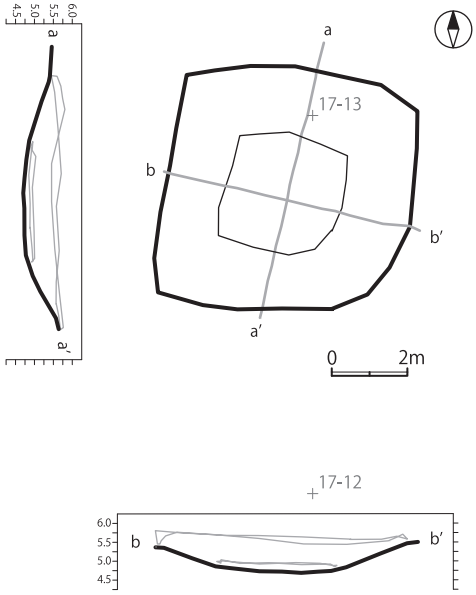
竪穴051　（南部 多角形 中型 やや深い）



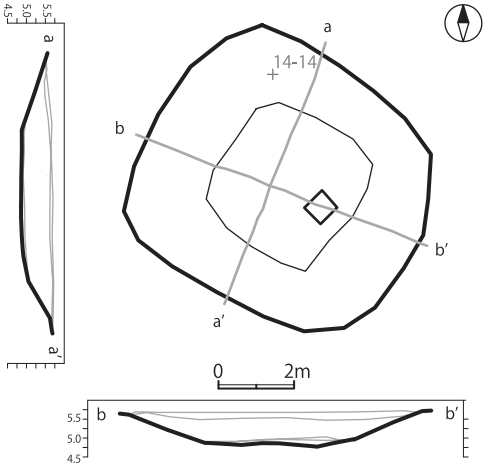
竪穴007　（南部 多角形 中型 深い）



竪穴019　（南部 方形 中型 深い）



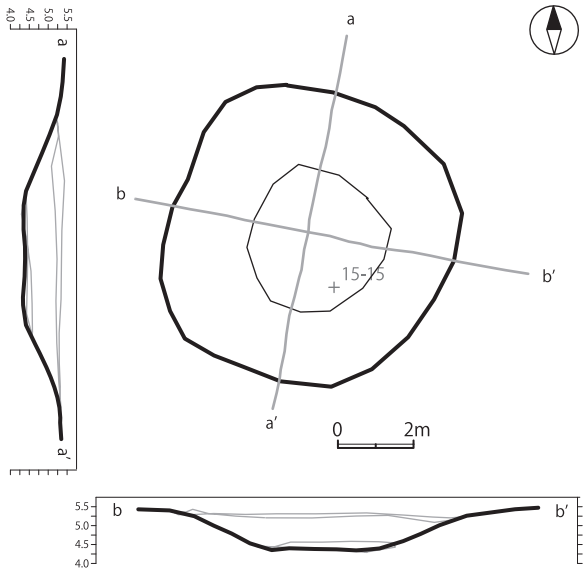
竪穴025　（南部 多角形 中型 深い）



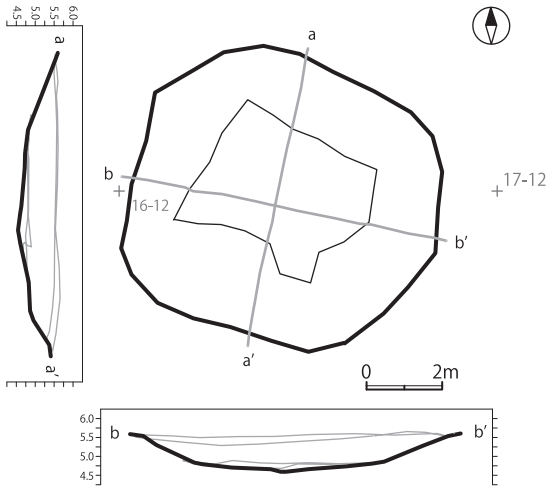
縮尺1：200

図Ⅱ－14　竪穴エレベーション図(4)

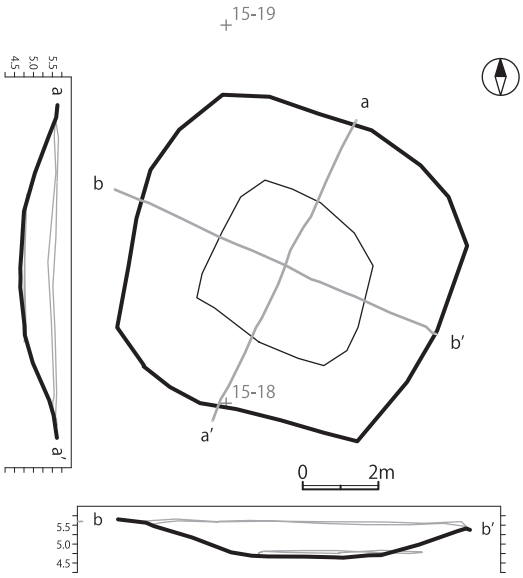
竪穴033　（南部 多角形 中型 特に深い）



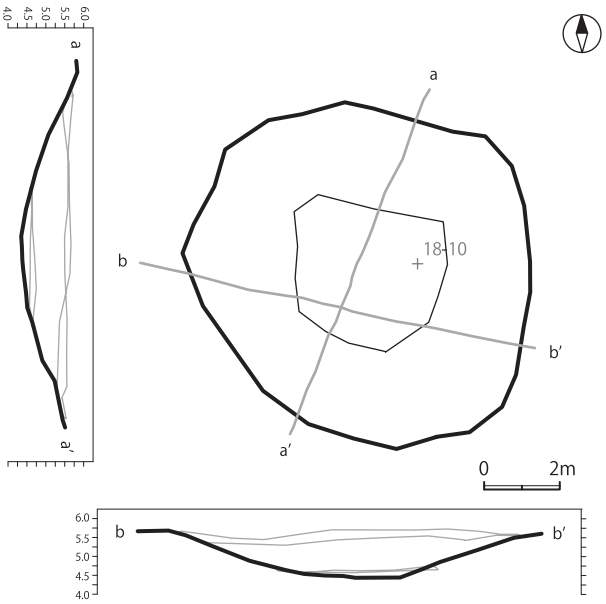
竪穴015　（南部 多角形 中ー大型 深い）



竪穴047　（南部 多角形 中ー大型 深い）



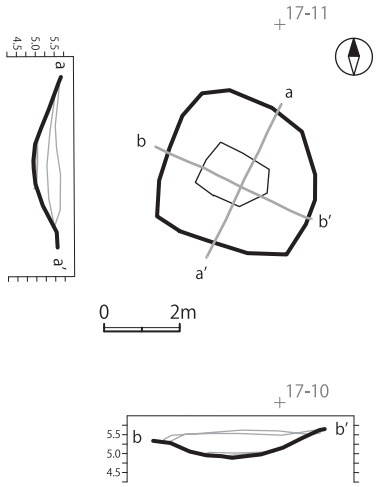
竪穴005　（南部 多角形 大型 特に深い）



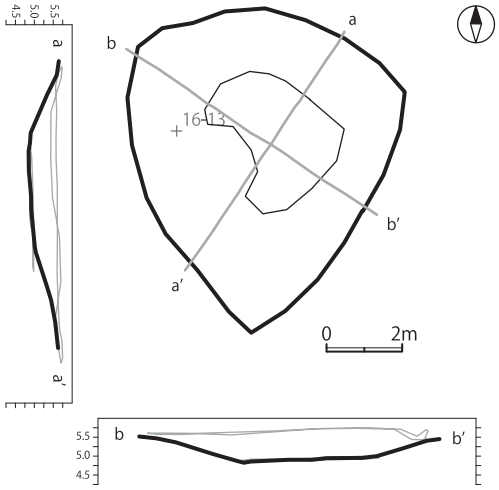
縮尺1：200

図Ⅱ－15　竪穴エレベーション図(5)

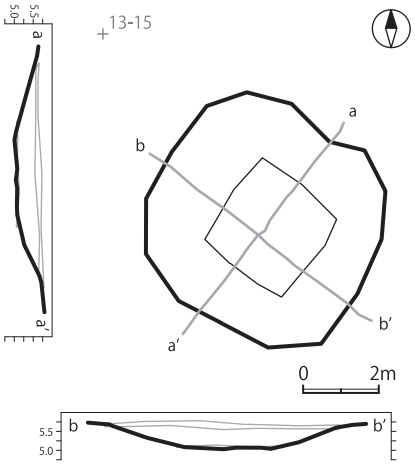
竪穴008　（南部 方形 小ー中型 やや深い）



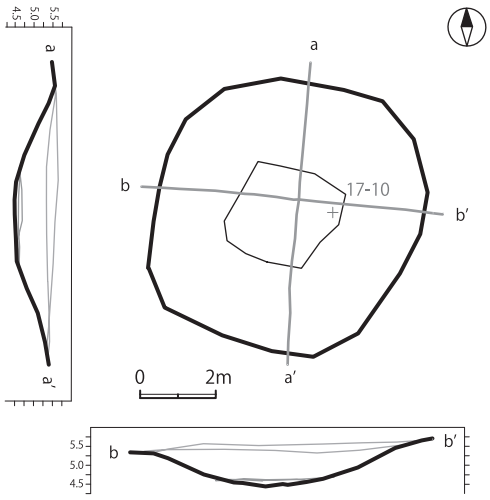
竪穴020　（南部 方形 中型 やや深い 投げ込みあり）



竪穴040　（南部 方形 中型 やや 深い）



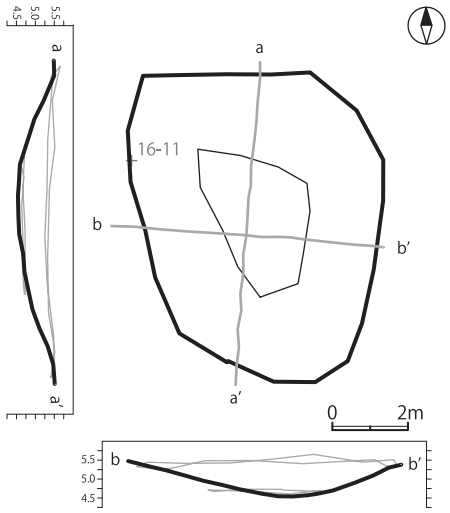
竪穴006　（南部 方形 中型 特に深い）



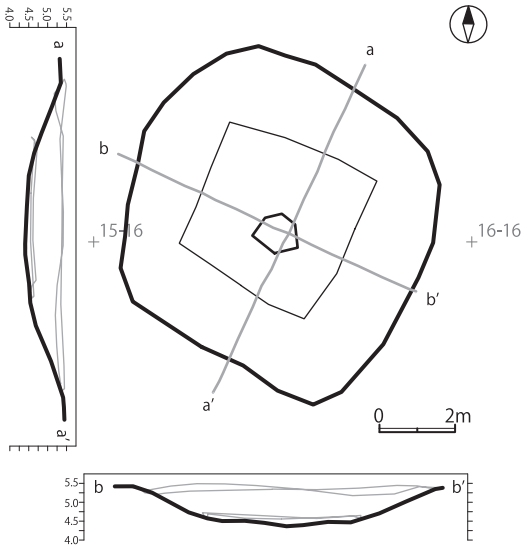
縮尺1：200

図Ⅱ－16　竪穴エレベーション図(6)

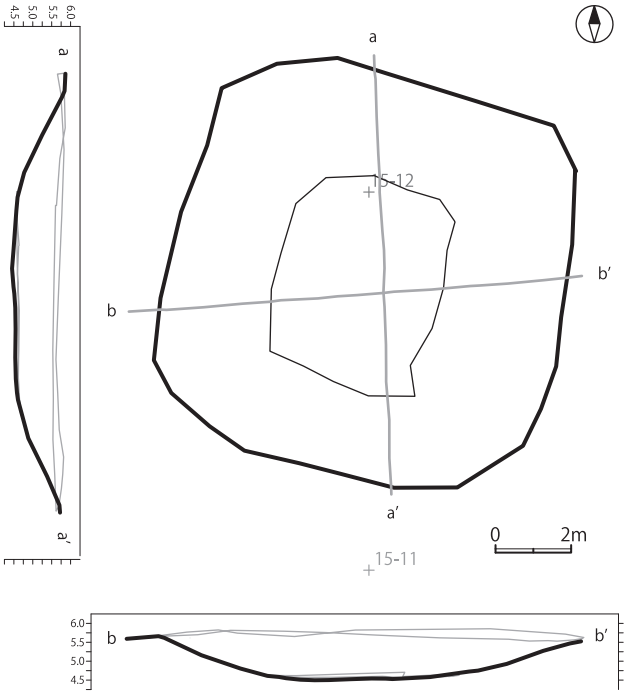
竪穴010　（南部 方形 中ー大型 深い）



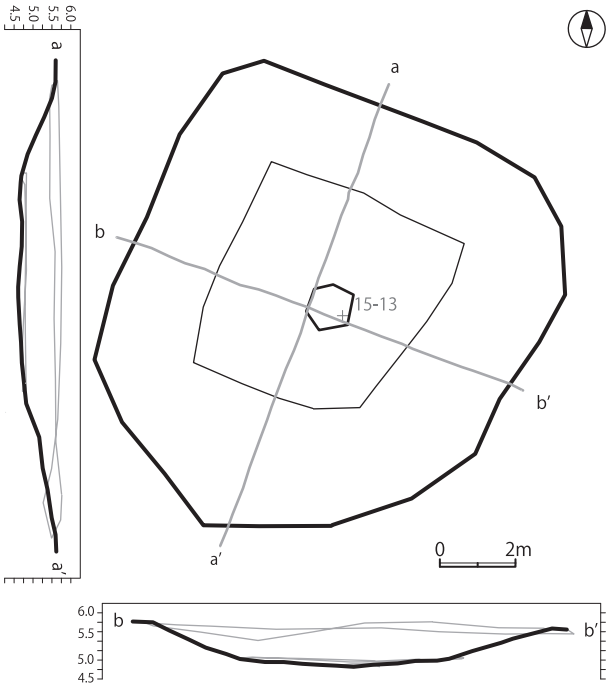
竪穴034　（南部 方形 中ー大型 深い）



竪穴022　（南部 方形 特大型 特に深い）



竪穴026　（南部 方形 超特大型 深い投げ込みあり）



縮尺1：200

図Ⅱ－17　竪穴エレベーション図(7)

規模間の関係には特に規則性などは見出せないが、近接する超特大方形竪穴間で投げ込み関係がみられ（竪穴22→26）、近接位置に同規模の建て替えを行ったことが考えられる。また、投げ込み方向についても明瞭な規則性は見出し難い。

このほか、平面形が歪な台形や多角形を呈するものの一部は掘上げ土の影響による変形と認められる。

オ．礫の分布と埋没状況

竪穴下面の礫分布と竪穴覆土に埋没する礫の確認を行い、集計結果を表Ⅱ－５に、該当竪穴を表Ⅱ－６に示した。これらからは石組み炉の存在が想定できる。竪穴下面に露出する礫は円形（竪穴４）と多角形（竪穴47）にみられ、いずれも40cmほどの大きさであった。ただし竪穴４の礫は道路の客土に関連する疑いがある。

覆土下の埋没礫は円形が２例（竪穴85・97）、多角形が１例（竪穴32）、方形が１例（竪穴18）みられた。多角形はオホーツク文化の竪穴の可能性があり、同時期の竪穴に石組み炉が普遍的に伴うことがこれまでの調査により確認されている。

方形で石組み炉を伴う場合、トビニタイ文化の竪穴が想起されるが、オホーツク海沿岸における同文化の竪穴の確認例は常呂川下流域が北限とされている（村本・榊田2018）。しかし詳細不明資料ではあるが、本遺跡が所在する川西地区でトビニタイ式土器１点が採取されており、湧別川下流域でのトビニタイ文化集団と擦文文化集団の交流が行われていたと考察されている（榊田2009）。本遺跡の方形住居については今後時期特定を目的とした調査が必要と考えられる。

⑶　関連資料調査

今年度は、湧別町教育委員会が所蔵する1989年の採集資料の調査を行った。対象資料は、当時の紋別市立郷土博物館学芸員佐藤和利氏によって採集されたものである。ポリ袋に収納されており、袋には黒インクで「89・11・13（指定地裏　東端起耕地）湧別シブノツナイ．表採」と記入されている。この記載から、採集地はシブノツナイ竪穴住居群や川西２遺跡の立地する台地の東端にあった畑地、すなわち、川西２遺跡の南～南西に隣接して現在も利用されている畑地と推定される。

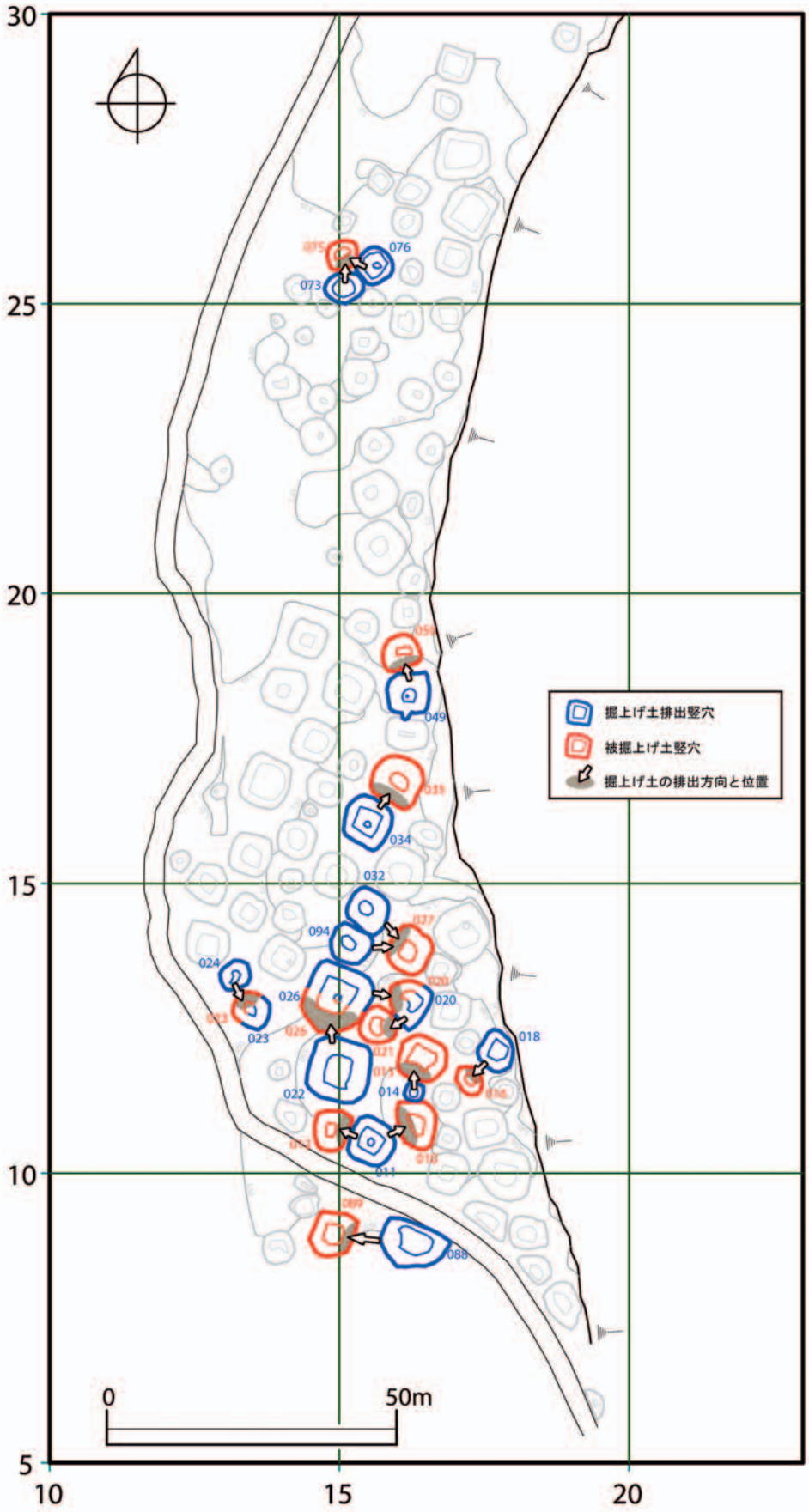
袋には土器片11点が水洗・注記されて収納されていた。注記はすべて、「シブノツナイ　891113」である。注記の保護のためにラッカーを塗布した後、全点について拓影図・断面図の作成および写真撮影を行った（図Ⅱ－19、図版６－３）。

資料はすべて、続縄文文化期の後北Ｃ$_2$・Ｄ式土器である。１～３は口縁部の破片。１は口縁部に３条、２は２条、３は１条の貼付文が巡る。貼付文上の刻みは、１・３では摩耗のため判然としないが、明瞭には認められない。３の貼付文には刻みはない。２は突起と表現したがあるいは平縁かもしれない。口唇に刻みがある。

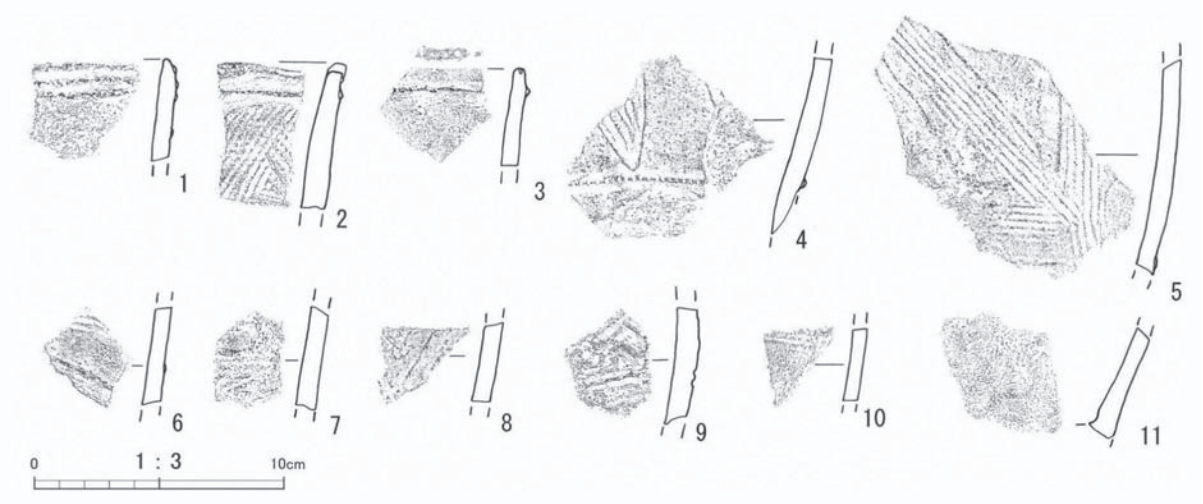
４～10は胴部破片。４・５の文様帯は微隆起線を伴う帯縄文によって構成される。４は文様帯の下端が刻みのある貼付文で区画される。６～10にはいずれも微隆起線や帯縄文が施される。６は５の同一個体とみられる。９は平面形が三角形の列点文が加えられる。

11は無文の底部ぎわの破片。内面の底部と胴部の変換部は、浅く溝状にくぼんでいる。

今回の資料は断片的なものではあるが、口縁部に刻みのない貼付文が巡ること、文様帯が微隆起線を伴う帯縄文で構成されること、列点文が少ないこと等の要素は、熊木の「Ⅲ期」の特徴に該当しており（熊木2018）、道東部の後北Ｃ$_2$・Ｄ式後半期の様相を示すものと考えられる。



図Ⅱ－18　掘上げ土投げ込み竪穴の分布（1：1100）



図Ⅱ－19　隣接地表採資料

5　まとめ

⑴　測量成果と竪穴観察結果について

今年度の調査によって竪穴102軒を確認した。竪穴群はセンサイ川左岸の台地上にあり、段丘崖に沿って南北約250mの範囲に細長く分布する。竪穴は円形（40軒・39.2%）、多角形（21軒・20.6%）、方形（41軒・40.2%）がみられ各形状に著しい偏りはみられない。長期間に亘って断続的に集落が形成された複合遺跡と捉えられる。

竪穴形状の全体の傾向として、円形は小型で浅いもの、多角形と方形は大型で深いものが多く認められるが、北エリアに分布する方形は浅く例外的である。分布では東－西20ラインを境に北エリアと南エリアに区分でき、竪穴の分布に異なる特徴を見出すことができる。以下、本章４節で確認した成果をまとめる。

① 北エリアは円形・小－中～中型を主体とした竪穴群と、方形・小－中～中型を主体とした竪穴群で構成され、いずれも深さ0.5m未満の浅い竪穴が多数を占める。

② 南エリアは多角形・方形の中型以上の竪穴が主体で、いずれも深さ0.5m以上の深い竪穴が多数を占める。また両者が混在して分布する。

③ 円形は大きく南北に分布が分かれるが、特に北エリア東－西25ライン付近に密に分布する。

④ 多角形は遺跡南部にまとまり、深いものが目立つ。

⑤ 多角形は規模の大きい竪穴ほど段丘縁に近い範囲に分布する傾向がある。

⑥ 方形は遺跡の北部・中央部・南部の３つのまとまりに分けられ、北部の竪穴は浅い特徴がみられる。

⑦ 方形は10m前後の大～超特大規模のものが南西側の微高地に分布する傾向がある。

⑧ 掘上げ土の投げ込みは方形から他形状および方形へ排出された例が大多数を占め、想定される竪穴形状の時期と整合的である。

⑨ 方形住居には石組み炉と考えられる礫が埋没するものがあり、トビニタイ文化の竪穴の可能性が指摘できる。

①・③からは北エリアの竪穴群が主に縄文時代～続縄文文化期に、②・④からは南エリアの竪穴群が主にオホーツク文化期～擦文文化期に形成されたことが考えられ、南北エリアの竪穴構造の違いは

時期の違いに起因すると推測できる。またオホーツク文化期以降は深い構造の竪穴が主体となるとみられる。但し、⑥のように方形については南北エリアで深さに明瞭な違いがみられ、擦文文化期に異なる構造の竪穴を南北に配置し利用した可能性がある。⑤・⑦からは多角形・方形は規模ごとに選地して竪穴を構築し集落を構成した可能性が考えられるだろう。またオホーツク文化の竪穴は同地点での改築をする例が多くみられるため、地表面で観察できる内容よりもさらに複雑な様相となるとみられる。

上記の検討には各構造の竪穴の時期特定が必要であり、次年度以降発掘調査を実施する計画である。

⑵　シブノツナイ竪穴住居群との比較

調査目的であるシブノツナイ竪穴住居群と川西２遺跡の関係検討のため、両遺跡の調査成果について比較を行う。

ア．形状別の竪穴分布状況について

シブノツナイ竪穴住居群では円形竪穴が東側の一定範囲にまとまり、これを避けながらも遺跡全体に方形竪穴が濃く分布する様子がみられた。川西２遺跡でも同様に、円形竪穴が北エリアの一定範囲を占有し、方形竪穴が遺跡全体に広く分布する状況がみられる。両遺跡とも方形が多く主に擦文文化期に集落が形成されたとみられ、川西オホーツク遺跡を含めた３遺跡の集落変遷の様相を明らかにすることが今後の課題となると考える。

川西２遺跡では多角形の竪穴が遺跡南部に良好にまとまって認められたが、シブノツナイ竪穴住居群の多角形の分布は散発的で不明瞭であり、違いがみられる。むしろ川西オホーツク遺跡との関連が注目され、海岸線より数百メートルほど内陸の台地上にオホーツク文化の集落が展開したことが考えられる。川西２遺跡ではオホーツク文化の資料が得られていないため詳細な時期は不明であるが、川西オホーツク遺跡では貼付浮文土器期の集落が良好に確認されている（北海道立北方民族博物館1995）。該期は平安海進と呼ばれる温暖期にあたり、サロマ湖を例とした試算では８世紀と10世紀を

図Ⅱ－20　遺跡周辺の海水面上昇シミュレーション（2.5m上昇）

ピークに2.1～2.6mの海水面上昇があったとされる（赤松1998、平井2002）。図Ⅱ－19は2.5mの海水面上昇をシミュレーションしており、水域がせまる環境にオホーツク文化の集落が営まれたと考えられる。

イ．方形の特大・超特大竪穴について

【シブノツナイ竪穴住居群と川西２遺跡の様相】

シブノツナイ竪穴住居群では、10mを超える特大・超特大の方形竪穴（以下、大竪穴）が13軒みられ、２～３軒のまとまり（セット）が５～６単位、遺跡内の微高地を選択し構築した様子が復元された。これらは周辺の竪穴長軸方向が揃う小・中竪穴と併存して集落を形成したことが考えられ、単純計算ではあるが22軒に１軒の割合で大竪穴が存在している状況も把握できた。さらに近接する大竪穴間で掘上げ土の投げ込みがみられたことから、セットとなる大竪穴は、並存もしくは近接範囲での建て替えを示すものと推測できた。

川西２遺跡では南エリアを中心に８m以上の方形竪穴が分布し、その中で特大・超特大の大竪穴が若干ではあるが段丘縁から離れた南西部の微高地を選択した状況が窺える。また北エリアと南エリアでそれぞれ２～３軒が近接する大竪穴の単位が認められ、北エリアでは5.5軒に１軒、南エリアでは13軒に１軒の割合で大竪穴が存在している。大竪穴間の掘上げ土の投げ込みについても南エリアで１例認められた。

【竪穴の選地】

藤本強は擦文文化期の住居変遷について、主に常呂川下流域や天塩川流域の遺跡の観察を通して「もっとも好適と考えられる位置に住居はまず作られ、次第に劣悪な条件の地に移っていく。」と指摘している（藤本1981）。本調査に関わる２か所の遺跡については、大型住居が段丘縁からやや離れた微高地を選択する共通性が認められ、微高地を好適地として優先的に選地したことが推測される。藤本が提示するような擦文住居の規制パターンが、本遺跡でも生じていた可能性が考えられる。

【大竪穴のセット】

大竪穴のセットが複数単位存在する様子が両遺跡に共通して認められた。両遺跡とも大竪穴を中心に周辺の小・中竪穴が並存して集落が展開されたと推測できる。大竪穴間の距離であるが、シブノツナイ竪穴住居群の例では10～10数mが多く、10m未満に近接するものに掘上げ土の関係があった。川西２遺跡では大竪穴が近接する傾向があり、シブノツナイ竪穴住居群と同様に掘上げ土の関係もみられる。

藤本の提示する擦文住居の規制には「住居相互の距離は地形、前代の窪みの位置によっても違ってくるが、原則として住居の辺と等しいか一辺の２倍ぐらいの距離である。」とある（藤本1981）。シブノツナイ竪穴住居群では多くに規制の距離が保たれ、同時併存の可能性がある。しかし近接するものについては掘上げ土の関係が示すように、建替え（移築）が考えられる。川西２遺跡も近接と掘上げ土から大竪穴は並存ではなく建替えと判断できる。そのため、一時期の集落構成は北エリアで小中５～６軒に大１軒、南エリアでは小・中10軒前後に大１軒と推測できる。いずれも詳細な発掘調査により検証すべき事項ではあるが、予察的に可能性を指摘しておきたい。

【引用・参考文献】

報告書等

北海道立埋蔵文化財センター　2015　『重要遺跡確認調査報告書第10集』
2016　『重要遺跡確認調査報告書第11集』
2017　『重要遺跡確認調査報告書第12集』
2018　『重要遺跡確認調査報告書第13集』
公益財団法人北海道埋蔵文化財センター　2015　「湧別町シブノツナイ２遺跡』　北埋調報316
北海道立北方民族博物館　1995　「北方民族博物館調査報告 湧別町川西遺跡』
大場利夫　1966　「湧別町シブノツナイ遺跡調査概要』 湧別町教育委員会
米村喜男衛　1961　「紋別郡湧別町川西遺跡調査報告書』湧別町
米村哲英　1963　「北海道紋別郡湧別町字川西シブノツナイ遺跡調査概報』湧別町

論文等

赤松守雄・石橋孝夫・斎藤文紀・山田悟郎・右代啓視　1998　「北方諸地域における歴史時代の環境復元」『北の文化交流事業　中間報告』　北海道開拓記念館
右代啓視　1999　「擦文文化の拡散と地域戦略」『北海道開拓記念館研究紀要』 第27号　北海道開拓記念館
熊木俊朗　2018　『オホーツク海南岸地域古代土器の研究』　北海道出版企画センター
笹田朋孝・高瀬光永・榊田朋広　2009　「湧別町川西遺跡出土資料の紹介」『北方探究』　第９号　北方談話会
澤井　玄　1998　「北海道北東部における擦文文化の拡散と終末について」『野村　崇先生還暦記念論集　北方の考古学』　野村　崇先生還暦記念論集刊行会
2008　「11世紀～12世紀の擦文人は何をめざしたか」『アイヌ文化の成立と変容－交易と交流を中心として【上】　エミシ・エゾ・アイヌ』　岩田書院
平井幸弘　2002　「オホーツク海沿岸の自然環境とその変貌」『北の異界　古代オホーツクと氷民文化』東京大学コレクションⅩⅢ　東京大学総合研究博物館
藤本　強　1981　「擦文文化」『地学雑誌』第90巻第２号　東京地学協会
1988　『もう二つの日本文化』東京大学出版会
村本周三・榊田朋広　2018　「トビニタイ文化期の遺構・遺物出土遺跡について」『セツルメント研究』９号　セツルメント研究会

表Ⅱ－６　確認竪穴一覧

竪穴番号	平面形状	略形状	長軸(m)	短軸(m)	面積(㎡)	規模	深さ(m)	深さ	エレベーション	下端凹み	下端礫埋没礫	掘上げ土投げ込み	特記事項	再検討要竪穴	所在エリア
1	方形	方形	7.6	(5.4)	(35.6)	中	0.67	やや深い					道路で西側が埋められ変形 東側段丘崖に接する		南エリア
2	不整円形？	円形	6.0	(4.2)	(19.7)	中	0.39	浅い					道路で西側が埋められ変形		南エリア
3	方形	方形	6.6	5.1	31.3	中	0.47	浅い							南エリア
4	不整楕円形？	円形	8.8	(4.5)	(30.9)	中-大	0.50	やや深い			下端礫 40cm1点		道路で西側が埋められ変形		南エリア
5	不明瞭な六角形	多角形	9.5	8.9	64.2	大	1.20	特に深い	測量済	有					南エリア
6	方形	方形	7.5	6.9	41.7	中	1.03	特に深い	測量済	有					南エリア
7	不明瞭な五角形	多角形	7.4	6.7	44.1	中	0.91	深い	測量済						南エリア
8	方形	方形	4.1	3.9	13.8	小-中	0.60	やや深い	測量済						南エリア
9	円形	円形	5.0	4.9	18.6	小-中	0.59	やや深い							南エリア
10	長方形	方形	8.1	6.7	44.7	中-大	0.90	深い	測量済			西壁にあり 竪穴11からか	掘上げ土投げ込みにより変形か		南エリア
11	不明瞭な方形	方形	7.6	7.5	50.8	中	0.87	深い		有					南エリア
12	不明瞭な五角形	多角形	7.0	6.0	35.4	中	0.80	深い				東壁にあり 竪穴11からか			南エリア
13	方形？	方形	6.1	(4.8)	(22.9)	中	0.66	やや深い					道路で西側が埋められ変形		南エリア
14	円形	円形	3.2	3.1	10.5	小	0.44	浅い							南エリア
15	六角形	多角形	8.2	7.3	51.4	中-大	0.94	深い	測量済	有		南壁にあり 竪穴14からか			南エリア
16	楕円形	円形	(5.5)	(4.0)	(16.7)	中	0.50	やや深い				北東壁にあり 竪穴18からか	掘上げ土投げ込みにより変形か		南エリア
17	方形	方形	4.9	4.6	17.9	小-中	0.63	やや深い					東側段丘崖に接する		南エリア
18	方形	方形	6.3	6.1	31.8	中	0.81	深い			埋没礫？ 下面から40cm下		東側段丘崖に接する		南エリア
19	方形	方形	6.5	6.5	38.3	中	0.80	深い	測量済						南エリア
20	方形	方形	7.5	7.4	(42.9)	中	0.67	やや深い	測量済			北西壁にあり 竪穴26からか	掘上げ土投げ込みにより変形か		南エリア
21	不明瞭な方形	方形	6.3	6.2	(30.8)	中	0.71	やや深い				東壁にあり 竪穴20からか	掘上げ土投げ込みにより変形か		南エリア
22	方形～五角形	方形	10.5	10.4	100.4	特大	1.25	特に深い	測量済	有					南エリア
23	不明瞭な五角形	多角形	6.4	5.7	30.6	中	0.71	やや深い				東壁にあり 竪穴24からか			南エリア
24	方形	方形	5.3	4.4	20.2	小-中	0.58	やや深い							南エリア
25	五角形	多角形	7.7	6.8	45.7	中	0.82	深い	測量済	有					南エリア
26	方形～五角形？	方形	12.2	11.0	(109.4)	超特大	0.93	深い	測量済			南西壁にあり 竪穴22からか	埋没の影響か南側壁が段状となっている 掘上げ土投げ込みにより変形している		南エリア
27	方形	方形	7.7	7.2	47.2	中	0.89	深い				北西壁にあり 竪穴32・94からか			南エリア
28	方形	方形	5.0	4.9	22.2	小-中	0.47	浅い							南エリア
29	五角形	多角形	9.6	9.1	72.8	大	1.26	特に深い					下端面凹凸あり 東側段丘崖に接する		南エリア
30	楕円形	円形	6.3	4.6	21.1	中	0.53	やや深い							南エリア
31	不明瞭な五角形	多角形	8.8	8.6	62.8	中-大	1.17	特に深い							南エリア

竪穴番号	平面形状	略形状	長軸(m)	短軸(m)	面積(㎡)	規模	深さ(m)	深さ	エレベーション	下端凹み	下端礫埋没礫	掘上げ土投げ込み	特記事項	再検討要竪穴	所在エリア
32	不明瞭な五角形	多角形	7.4	7.0	42.2	中	0.83	深い			埋没礫？ 下面から15cm下				南エリア
33	不明瞭な五角形	多角形	7.7	7.4	47.9	中	1.01	特に深い	測量済				下面中央やや盛り上がる		南エリア
34	方形	方形	8.2	7.9	56.4	中-大	0.93	深い	測量済	有					南エリア
35	方形～五角形？	方形	8.5	8.1	59.7	中-大	0.98	深い				南西壁にあり 竪穴34からか			南エリア
36	不明瞭な方形	方形	5.1	4.6	19.1	小-中	0.63	やや深い							南エリア
37	不明瞭な六角形	多角形	6.6	5.8	30.7	中	0.78	やや深い							南エリア
38	円形～方形	円形	6.9	6.5	37.1	中	0.70	やや深い							南エリア
39	方形	方形	7.2	7.2	44.5	中	0.77	やや深い							南エリア
40	方形	方形	6.2	6.0	31.1	中	0.64	やや深い	測量済						南エリア
41	不明瞭な五角形	多角形	7.8	7.4	47.4	中	0.87	深い							南エリア
42	不明瞭な五角形	多角形	6.9	6.7	37.3	中	0.64	やや深い	測量済						南エリア
43	方形	方形	8.7	8.3	63.9	中-大	0.84	深い							南エリア
44	不明瞭な五角形	多角形	7.3	7.3	45.8	中	0.70	やや深い	測量済						南エリア
45	不明瞭な五角形	多角形	7.4	7.1	47.1	中	0.89	深い					下端面凹凸あり		南エリア
46	方形	方形	6.3	6.2	34.3	中	0.86	深い							南エリア
47	五角形	多角形	8.7	8.6	61.0	中-大	0.93	深い	測量済		下端礫 40×20cm1点				南エリア
48	長方形～ 不明瞭な五角形	方形	7.5	5.5	35.7	中	0.82	深い							南エリア
49	方形	方形	7.4	6.9	46.0	中	0.84	深い		有			倒木あり 南壁突出部あり		南エリア
50	長方形	方形	6.6	5.6	31.4	中	0.60	やや深い				南壁にあり 竪穴49からか	掘上げ土投げ込みにより変形か		南エリア
51	不明瞭な五角形	多角形	6.0	5.5	26.9	中	0.70	やや深い	測量済						南エリア
52	方形	方形	5.2	5.0	22.2	小-中	0.53	やや深い							南エリア
53	不明瞭な五角形	多角形	5.5	5.1	21.6	小-中	0.59	やや深い							北エリア
54	不明瞭な五角形 ～ 方形	多角形	8.6	8.5	61.1	中-大	1.10	特に深い		有					北エリア
55	楕円形	円形	4.9	3.7	13.9	小-中	0.32	浅い							北エリア
56	不明瞭な五角形	多角形	7.8	7.3	48.6	中	0.87	深い	測量済	有			下端面やや凹凸あり		北エリア
57	楕円形	円形	5.3	4.6	19.6	小-中	0.47	浅い							北エリア
58	方形～楕円形	方形	5.7	5.4	25.8	小-中	0.53	やや深い							北エリア
59	方形	方形	6.1	5.8	29.7	中	0.67	やや深い							北エリア
60	不整楕円形	円形	4.3	4.2	14.4	小-中	0.34	浅い							北エリア
61	不整楕円形	円形	6.3	6.3	31.2	中	0.46	浅い						北側に風倒木痕状の盛上がりあり	北エリア

竪穴番号	平面形状	略形状	長軸(m)	短軸(m)	面積(㎡)	規模	深さ(m)	深さ	エレベーション	下端凹み	下端礫埋没礫	掘上げ土投げ込み	特記事項	再検討要竪穴	所在エリア
62	円形	円形	5.0	5.0	19.5	小-中	0.53	やや深い	測量済						北エリア
63	円形～方形	円形	6.5	6.3	33.5	中	0.69	やや深い							北エリア
64	楕円形	円形	6.0	5.2	25.7	中	0.54	やや深い							北エリア
65	不整円形	円形	5.5	4.8	19.2	小-中	0.43	浅い							北エリア
66	不整方形	方形	5.8	5.6	26.8	小-中	0.56	やや深い		有					北エリア
67	楕円形	円形	7.6	5.6	34.1	中	0.56	やや深い	測量済						北エリア
68	円形	円形	5.2	4.5	19.0	小-中	0.52	やや深い	測量済						北エリア
69	不整円形	円形	3.1	2.9	7.3	小	0.24	特に浅い							北エリア
70	不整円形	円形	2.5	2.3	4.9	極小	0.13	特に浅い						大木の間に位置し不明瞭	北エリア
71	不整楕円形	円形	5.0	4.2	17.3	小-中	0.32	浅い							北エリア
72	不整楕円形	円形	3.6	2.9	8.3	小	0.30	浅い							北エリア
73	不整楕円形	円形	6.3	5.2	26.8	中	0.32	浅い						不明瞭	北エリア
74	不整円形	円形	4.8	4.6	17.3	小-中	0.35	浅い							北エリア
75	不整楕円形	円形	5.4	4.8	21.3	小-中	0.41	浅い				南東壁にあり竪穴73・76からか	掘上げ土投げ込みにより変形か		北エリア
76	不整円形	円形	6.0	5.9	29.2	中	0.31	浅い		有				不明瞭	北エリア
77	楕円形	円形	4.5	4.0	14.1	小-中	0.27	特に浅い							北エリア
78	方形	方形	6.2	6.1	33.0	中	0.53	やや深い	測量済						北エリア
79	方形	方形	8.7	8.1	62.9	中-大	0.48	浅い							北エリア
80	不整円形	円形	5.3	4.9	17.0	小-中	0.49	浅い	測量済						北エリア
81	方形	方形	4.0	3.3	11.3	小-中	0.42	浅い							北エリア
82	不整方形	方形	4.3	3.9	15.5	小-中	0.31	浅い							北エリア
83	不整方形	方形	5.2	5.2	24.3	小-中	0.36	浅い							北エリア
84	方形	方形	9.2	9.0	70.2	大	0.47	浅い							北エリア
85	楕円形～方形	円形	4.9	4.8	19.4	小-中	0.38	浅い			埋没礫？下面から20cm下				北エリア
86	方形	方形	6.1	5.8	32.6	中	0.31	浅い	測量済						北エリア
87	不明瞭な方形	方形	4.8	4.6	18.1	小-中	0.45	浅い							北エリア
88	方形～楕円形	方形	11.2	(7.9)	(71.4)	超特大	0.65	やや深い					道路で東側が埋没し変形		南エリア
89	五角形	多角形	8.1	6.9	47.4	中-大	0.99	深い				東壁にあり竪穴88からか			南エリア
90	不明瞭な方形	方形	5.5	5.5	25.3	小-中	0.57	やや深い							南エリア
91	不整楕円形	円形	4.9	4.0	15.8	小-中	0.23	特に浅い						風倒木痕の可能性大	南エリア

竪穴番号	平面形状	略形状	長軸（m）	短軸（m）	面積（㎡）	規模	深さ（m）	深さ	エレベーション	下端凹み	下端礫埋没礫	掘上げ土投げ込み	特記事項	再検討要竪穴	所在エリア
92	不整楕円形	円形	4.2	2.5	7.7	小-中	0.47	浅い					道路で北東側が埋没	風倒木痕の可能性大	南エリア
93	楕円形	円形	4.4	3.9	14.1	小-中	0.28	特に浅い	測量済						南エリア
94	楕円形	円形	6.9	6.3	36.9	中	0.81	深い	測量済						南エリア
95	不整円形	円形	5.8	5.3	23.9	小-中	0.50	やや深い							南エリア
96	円形(浅皿状)	円形	4.4	3.9	13.2	小-中	0.26	特に浅い							南エリア
97	楕円形	円形	3.7	3.4	9.5	小	0.34	浅い			埋没礫？覆土中		道路で西側が埋没		南エリア
98	円形	円形	2.4	2.1	3.9	極小	0.31	浅い							南エリア
99	楕円形	円形	3.8	3.4	10.5	小-中	0.26	特に浅い							南エリア
100	円形	円形	2.8	2.5	5.4	小	0.19	特に浅い							北エリア
101	円形	円形	3.1	2.6	6.2	小	0.23	特に浅い							南エリア
102	円形？	円形	(5.4)	(2.5)	(9.6)	中	0.47	浅い					道路で西側が埋没し変形		南エリア

※道路に部分的に埋められたものの規模は推定面積から分類している。
※「所在エリア」は東西20ラインを境界に南北に区分けした。
※面積は上端の実面積を計測した。
※深さは上端高さの平均値と下端単点（最も深い地点）との差から算出した。
※竪穴が崩落や埋没などで欠失する場合は、現存値を括弧付で示した。

写 真 図 版

1　遺跡遠景　北東から

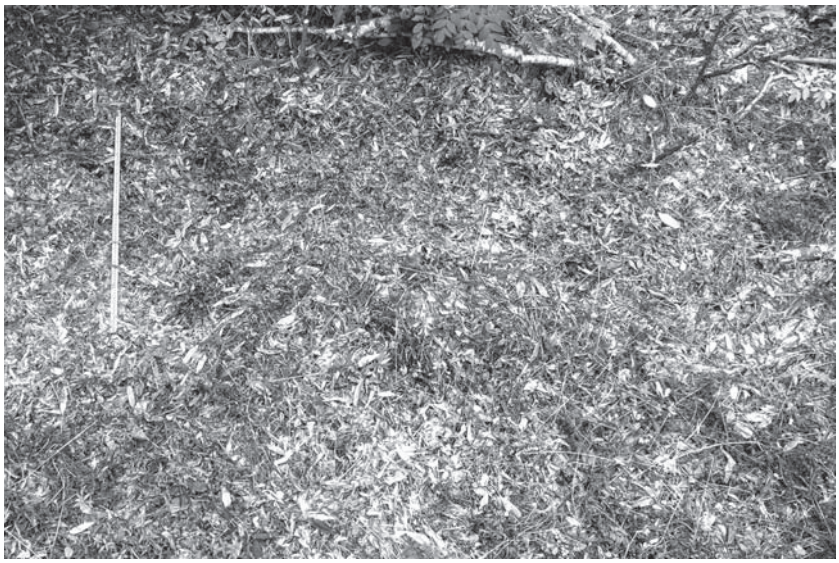
2　遺跡の立地する台地と周辺低湿部　南東から

図版 2

1　円形　小　竪穴14　南エリア　北から

2　円形　小　竪穴100　北エリア　北西から

3　円形　中　竪穴30　南エリア　北から



1　円形　中　竪穴76　北エリア　北東から

2　多角形　中　竪穴25　南エリア　南西から

3　多角形　中　竪穴64　北エリア　北から

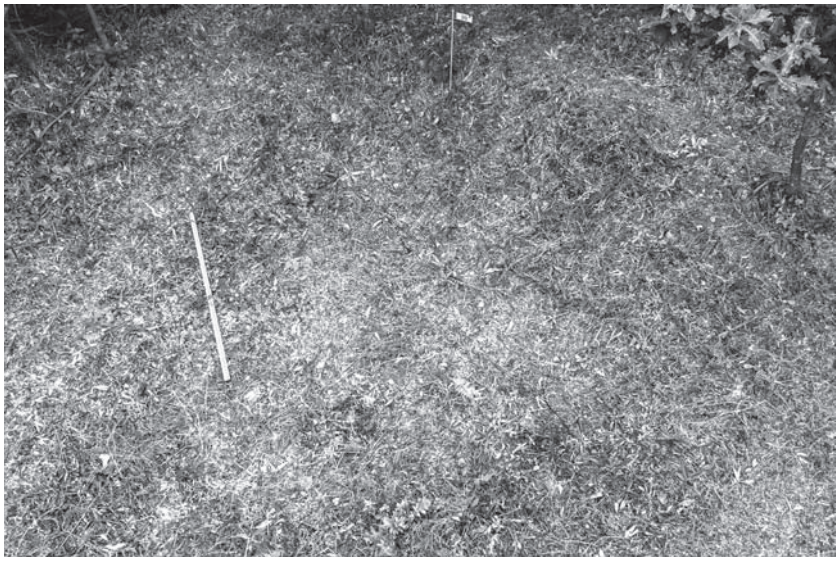
図版 4

1　多角形　大　竪穴5　南エリア　西から

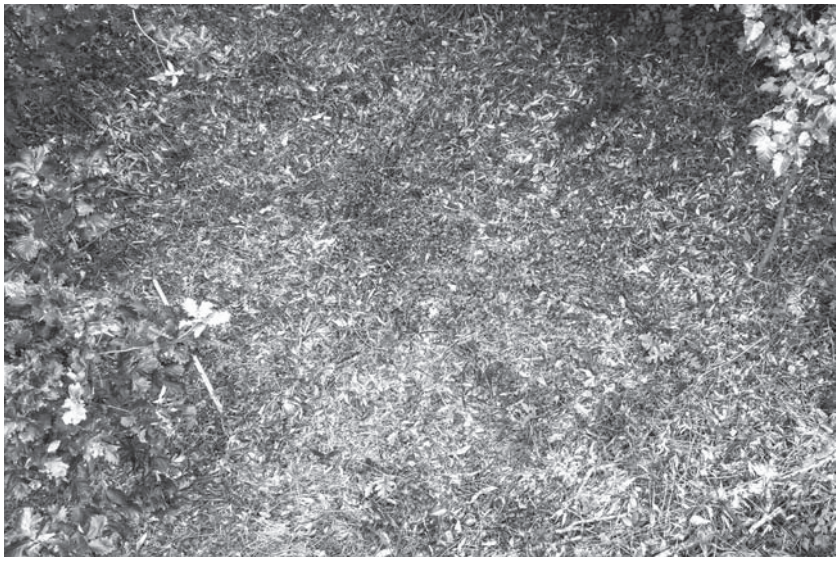
2　多角形　大　竪穴29　南エリア　南西から

3　方形　小ー中　竪穴8　南エリア　西から

1　方形　小一中　竪穴81　北エリア　南から



2　方形　中　竪穴20　南エリア　南東から

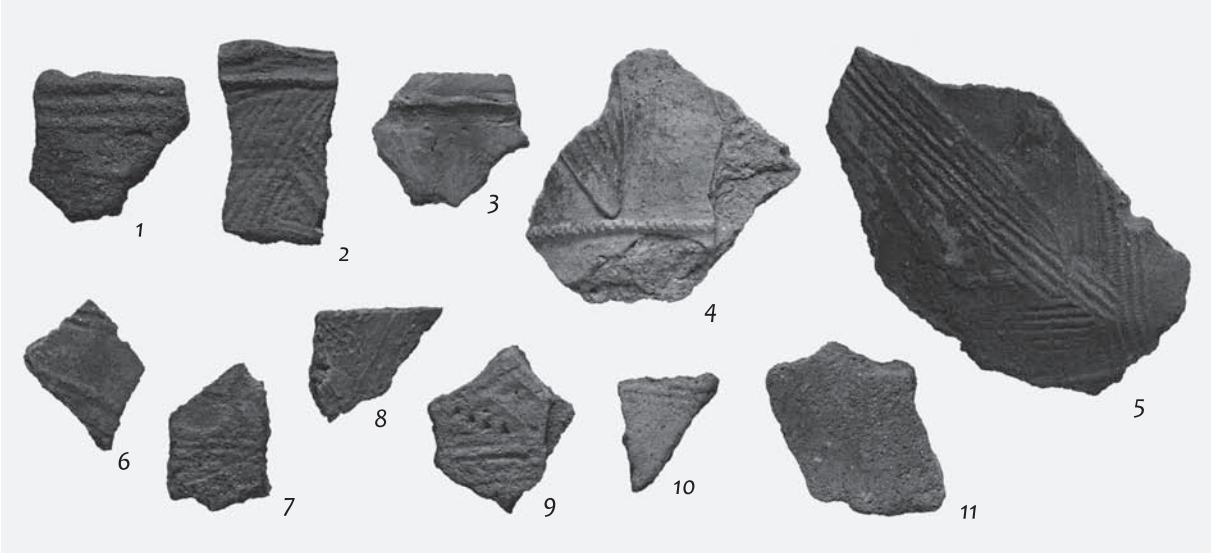


3　方形　中　竪穴79　北エリア　北から

図版 6

1　方形　大　竪穴22　南エリア　東から

2　方形　大　竪穴84　北エリア　北から



3　隣接地表採資料（関連資料調査）

報　告　書　抄　録

ふりがな	じゅうよういせきかくにんちょうさほうこくしょ　だいじゅうよんしゅう
書名	重要遺跡確認調査報告書　第14集
副書名	湧別町川西２遺跡
巻次	
シリーズ名	重要遺跡確認調査報告書
シリーズ番号	第14集
編著者名	坂本尚史　中山昭大　柳瀬由佳　田口　尚
編集機関	北海道立埋蔵文化財センター指定管理者　公益財団法人北海道埋蔵文化財センター
所在地	〒069-0832　北海道江別市西野幌685番地1　　TEL 011-386-3231
発行年月日	西暦　2019年３月26日

ふりがな 収録遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
川西２遺跡（かわにしにいせき）	北海道湧別群（ほっかいどうゆうべつぐん） 湧別町字川西（ゆうべつちょうあざかわにし） 501-1、508、509	01559	I-21-56	44度 24分 08.87秒	143度 57分 94.95秒	2018 0903 ～ 0922	約17,000㎡	重要遺跡 確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川西２遺跡	集落跡	オホーツク 文化期 擦文文化期	円形・多角形・方形を呈する竪穴102か所	関連資料調査遺物 続縄文文化後半期 後北C2・D式土器	測量調査 関連資料調査

要　約

遺跡は湧別町川西地区を流れる湧別川支流センサイ川左岸の段丘上に立地し、竪穴群は段丘縁に沿って南北約250mの範囲に細長く分布する。遺跡全体で102か所の竪穴を確認し、縄文時代～続縄文文化期とみられる円形（40軒・39.2%）、オホーツク文化期とみられる多角形（21軒・27.3%）、擦文文化期とみられる方形（41軒・40.2%）で構成される。

竪穴群は北エリアと南エリアに大別でき、異なった竪穴分布の特徴がみられる。北エリアは円形・方形、大きさ５m以下、深さ0.5m未満を主とし、分布密度がやや低い。南エリアは多角形・方形、大きさ６m以上、深さ0.5m以上を主とし、分布密度が高い。

多角形と方形については、大きさによって分布位置が異なる様子がみられ、前者は大きい竪穴ほど段丘縁に近く、後者は南エリアで10m規模の竪穴が微高地である南西部に位置する傾向がある。

また、方形は10m前後の大きな竪穴２～３軒のまとまりが南北エリアそれぞれにみられるが、こうした２軒程度の大型竪穴の単位が遺跡内に複数分布する様子は、近隣のシブノツナイ竪穴群でも認められている。

北海道立埋蔵文化財センター

重要遺跡確認調査報告書　第14集

発行年月日　平成31年３月26日

編集　北海道立埋蔵文化財センター指定管理者
公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター

発行　北海道立埋蔵文化財センター

〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1

TEL 011-386-3231　FAX 011-386-3238

URL http://www.domaibun.or.jp

印刷：社会福祉法人 北海道リハビリー

〒061-1195 北海道北広島市西の里507番地1

TEL 011-375-2116㈹・FAX 011-375-2115